

授業改善ハンドブック

「授業の窓」

授業を創る

福島県教育資料研究会

発刊によせて

当教育資料研究会では、各学校の先生方の授業改善に役立てていただきたいと考え、昨年、授業改善ハンドブック『授業を変える』を発刊いたしました。大変好評で、小中学校の教多くの先生方にご講読いただきました。ありがとうございました。

『授業を変える』は、教師として共有し合いたい基本的な指導技術に関することにウエイトを置いて編集し、まとめました。

そこで、今回は、子どもの「学び」の支援者である教師が、もっと子どもの側に立ち、子どもの思いや願いを生かし、楽しく、分かる授業を、子どもと一体となって創造すべきではないかという基本的な考え方に立ち、『授業を創る』を発刊することにいたしました。

折しも、中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について―子供に【生きる力】と【ゆとり】を―」が発表され、教育が大きく変わろうとしています。そのために、教師はどのような授業創りをしなければならないか、大きな課題が課せられています。

元全国小学校道徳教育研究会長の沼田泉先生は、「教師のための明言・至言」（ぎょうせい発行）の中で、「授業とは、子どもが自分達だけでは到達できない高みにまで、自分の手や足を使って、よじ登っていくことを助ける仕事である。だから、子どもが主人公である。」と述べています。

確かに、授業の主人公は子どもでなければならないのです。

私たち教師の使命は、何といても子どもたちに真の学力を身に付けていくことです。「子どもが自ら学ぶことによって、基礎・基本は確実に定着する」などとも言われています。この言葉も、子どもを主人公とした授業創りがいかに大切であるかを訴えているものであるととらえられます。

本書は、このような考えに立ち、今求められている、授業創りに迫るために、何を、どのように改善すればよいか、20項目にわたり実践例を紹介しながら、そのポイントをまとめました。

本書が先生方に大いに活用され、授業改善に少しでもお役に立つことができれば幸甚に思います。

平成10年1月

福島県教育資料研究会 会長 水野 信

目 次

○ 発刊によせて

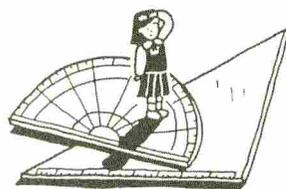
	ページ
1 今、授業を問い直す理由	1
2 新しい授業をどう創るか	3
(1) 今、私たちが求める授業改善の方向性	4
(2) 新しい授業の構想	6
(3) 授業を創る	14
3 授業を創るチャレンジの視点	
(1) 児童生徒が自ら学ぶ授業をどう創り出すか	
① 体験的な活動を重視して授業を創る	16
② 問題解決的活動を大切に授業を創る	20
③ 教材提示の工夫で授業を創る	24
④ 学習の仕方の定着で授業を創る	28
⑤ 学習意欲が持続する授業を創る	32
⑥ 学習の複線化を考慮して授業を創る	36
(2) 一人一人を生かす授業をどう創り出すか	
⑦ T・Tの導入で授業を創る	40
⑧ 子どもの自己評価を生かして授業を創る	44
⑨ 個に応じた支援ができる授業を創る	50
⑩ 個人カルテの活用で授業を創る	54
⑪ S-P表の活用で授業を創る	58
⑫ コンピュータの活用で授業を創る	62
⑬ 学習形態の工夫で授業を創る	66

(3) 21世紀に向けた新しい授業をどう創り出すか

- ⑭ クロスカリキュラムを作成して授業を創る……………72
- ⑮ 環境教育を意識した授業を創る……………76
- ⑯ 国際理解に通じる授業を創る……………82
- ⑰ ロールプレイングを導入して授業を創る……………86
- ⑱ 家庭や地域の教育力を生かして授業を創る……………90
- ⑲ 授業時間の弾力化を図って授業を創る……………94
- ⑳ 感動と共感で授業を創る……………98

○ あとがき

◇ 参考文献



1 今、授業を問い直す理由

現在、第三次教育革命が進行中です。

今次の教育改革では、間もなくやってくる多様で変化に富んだ21世紀をたくましく生き、未来を創造する子どもの育成を目指して、我が国の学校教育史上、明治維新期の「学制」発布、第2次大戦後の「6・3・3・4新学制」発足に匹敵するような大改革が提言されています。

このような教育改革の大きなうねりの中で、第15期中央教育審議会の第一次答申では、現在の教育の問題点を総ざらいした上で、これからの子どもたちに育てていく資質・能力は「変化の激しい社会を生きる力」であると方向づけました。

過熱化する受験競争、子どもを死にまで至らしめることもある深刻ないじめ、さらには増加し続ける不登校の問題など、今日の子どもたちを取り巻く教育の現況をみると、今、子どもたちに求められるのは、まさに「生きる力」であると痛感します。また、一層進展するであろう国際化社会や情報化社会の中で、子どもたちが創造的に活躍し、新時代を切り開いていくためにも「生きる力」は欠かせない資質であると強く感じます。

校内暴力、いじめ、不登校の問題等は、学校がかつて経験したことのない深刻な事態にあり、その原因が子どもの中にあるなどとは言ってられない状況にあります。私たちは今、これらの事態を当面する緊要な課題として受け止め、積極的にその解決に取り組んでいかなければなりません。

今、こうした時機に際会している学校が、そして私たち教師一人一人が、「生きる力」をどの子にもはぐくむために、“学校改善の一步をどう踏み出すか”を、厳しくそして期待をこめて見つめられているように思います。

では、学校をどのように改善していけばよいのでしょうか。何を変えれば学校が変わるのでしょうか。この答えは多様に考えられ、他方面にわたりそ

うですが、一つだけあげるとすれば、何と言っても私たちが日々実践している『授業』を変えることではないかと思えます。

学校教育の中軸をなすものは当然『授業』ですし、私たち教師の使命は、『授業』を通して目の前の子どもたちを育てることであると言っても過言ではないように思います。もちろん、学校の教育活動のすべてが授業というわけではありませんが、子どもの学校生活の大半の時間が『授業』の時間に当てられているし、私たち教師の仕事の中心も『授業』であることに異論はないと思います。

このように考えると、学校を変えていくためには、まず『授業』を変えること、つまり、日々の授業の担い手である私たち自身の『授業』を変えていくことが決め手になってくるように思われます。

私たちの授業を変える必要性について、国立教育研究所教科教育研究部長の中野重人氏は、

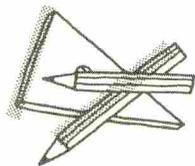
「 授業の改革なくして、新しい学校づくりなどおおよそできるはずがない。

『学校づくりは授業づくり』という認識を改めて確認しなければならない。」

また、お茶の水女子大学教授の宮原修氏は、

「 授業を創り直すことによって『いじめ』『不登校』などの問題の解決方法を探らなければならない。もちろんこれによっても完全に解決するわけではないが、これらの問題解決の根源に『授業』を置いてみることは緊急かつ重要なことである。」

と、指摘しています。



2 新しい授業をどう創るか

「学校を変えていくためには、まず『授業』を変えなければならない」ということを述べてきました。

学校を変える営みは、学校の主人公である「子どもを変える」営みと同義であり、そのことは、とりもなおさず「授業を変える」ことではないでしょうか。

今、どの学校のどの先生も「新しい学力観に立った学習指導」を念頭においた授業の改善に努めています。本県では、これに併せて「基礎学力の向上」を極めて重要な教育課題として掲げ、「授業の改善・充実」を目指して懸命に努力しています。

しかし、一方では「いっこうに授業が変わらない」ということも指摘されています。多くの教師が努力しているにもかかわらず、どうしてなのでしょう。

その原因は、どうも私たち教師自身の中に潜んでいるように思えてなりません。

私たち教師は、長年の間、明治以来の伝統的な学校教育のもとで学んできました。その授業の在り様は、教師主導の一斉指導が中心であり、知識や技能を「教え込む」ことを基軸とした授業であったように思います。そして、私たちは今まで、どうしても自分が教わってきたような指導方法で授業を進めてきましたので、新しい学力観が提唱されても、なかなか意識の変革ができないで困惑していたのではないのでしょうか。

新しい学力観の理念は理解できても、それが授業の質的転換にまで及ばない背景には、どうもこのような伝統的な授業の在り方が私たち教師に深く根付いてしまっていることがあげられるように思います。

(1) 今、私たちが求める授業改善の方向性

今、私たちの授業の質的転換が求められています。

前述してきたように、今まで進めてきた伝統的な授業の在り方を変えることは、簡単なことではないと思います。しかし今、学校の在り方が問われ、新しい学校づくりをしていくためには、その中核となる授業を変えていかなければならないことを、私たち教師の誰もが自覚しています。

前掲の中野重人氏は、

「要は、授業を変えるという発想の転換である。変わるから発展がある
と考えることである。まず、変えることにかけることである。この基本的な認識なくしては、どんな提案や試みも、元の木阿弥となる。いま、
学校が問われている。その存在意義を揺さぶられている。このとき、授業
を変えることなく、新しい学校づくりはないということを、まず心に
銘じるべきである。」

と述べ、私たち教師に熱いメッセージを寄せています。

では、私たちは授業改善の方向性をどこに求めればよいのでしょうか。

その方向性を導き出す方針は、県教育委員会発行・教育福島No204特集「学校教育の推進」に示されています。

そこでは、「(前略)『生きる力』は自ら学ぶ意欲と社会の変化に対応できる力として現行の学習指導要領で強調され、各学校で実現に向けて力を入れている新しい学力観に立った教育の考え方と重なっているので、各学校においては、学習指導要領の趣旨をふまえ、基礎・基本の定着、個性を生かす教育及び自己教育力の育成を重視し・・・(以下省略)。」と述べ、そのために、特に各学校に次のような取り組みの方向性を示し、授業の改善・充実を促しています。

一つは、新しい学力観に立った学習指導の推進を図るために、「自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力を育成していくには、各学校の教職員の特性や指導力、自然環境、地域の素材などを総合的に生かし、学習を展開していくことが大切である。」として、特に次のことをあげています。

- ・ 問題解決的な学習や体験的な活動の重視
- ・ 各教科間の関連を図った学習指導の展開

二つは、学習指導の弾力的な展開を図るために、「児童生徒が自分のよさを発揮し、自ら進んで学ぶ学習活動を実現するには、従来の指導法にとらわれることなく、学習過程や学習形態、一人一人の学習特性などに柔軟に対応していくことが大事である。」と指摘し、次のような視点での取り組みを求めています。

- ・ 複数の授業展開案準備の必要性
- ・ 充実した学習活動を可能にする学習形態や場の工夫
- ・ 指導目標に応じた学習時間の弾力的設定

三つは、児童生徒の資質や能力を伸ばす教材の開発を図る観点から、「児童生徒が自ら考え、判断し、表現する力を伸ばすためには、児童生徒の実態を踏まえた魅力的な教材を選択したり開発したりする必要がある。」として、次のようなことをあげています。

- ・ 複数教材の準備や児童生徒の日常生活などを考慮した地域素材の開発
- ・ 児童生徒一人一人に応じた補助的な教材の開発・活用

そのほかに、教職員や児童生徒のよさを生かす工夫として、

- ・ ティーム・ティーチングの導入
- ・ 養護教諭や学校栄養職員との連携

また、家庭や地域社会のよさを生かす工夫として、

- ・ 地域の自然や社会環境などの素材の教材化
- ・ 地域の文化施設や文化財等の積極的な活用



・ 地域の人々との連携・協力

等をあげ、各学校での主体的な取り組みを求めています。

上掲の県教育委員会「学校教育の推進」からも読み取れるように、今、私たち教師が求めるべき授業改善の方向性は、学習指導要領が目指す教育の実現を図るため、子ども一人一人のよさや可能性を生かすことを根底に据え、子どもたちが、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する」ことができる資質や能力を身につけることを重視して、授業を構想し、展開することであると言えるかと思えます。

(2) 新しい授業の構想

私たち教師は、目の前の子どものもっているよさや可能性が存分に発揮され、子どもが生き生きと活動する授業を目指して、日々、自分の授業変革への思いを強く抱き努力しています。

しかしながら、目の前の子どもたちの現実の姿を見つめてみると、このような姿が、いつでも、どの活動でも見られるかという点、残念ながらそうではない姿もまだまだ多く見られるのではないのでしょうか。

その原因は、どこにあるのでしょうか。それを、教師側の問題とするか、それとも子ども側のものとするかによって、私たちの授業変革への思いは自ずと違って来るように思います。

ややもすると、子どもの側に問題があるような発言を耳にすることがありますが、本当にそうなのでしょうか。たとえ、そうだとした場合、子ども側の問題として片付けてしまってもよいのでしょうか。私たち教師が、このような責任回避の姿勢をとっている限りにおいては、いくら授業変革への思いを強く抱いていても、子どもの現状の姿を変えていくことには結びつかないと思

います。

目の前の子どもが見せている今の学習の姿を振り返って、「もっと目を輝かせて学習活動に取り組む姿に変えていきたい」などと強く思い願う教師の心が、自分の「授業を変える」ことにつながるのだと確信します。

このように考えてくると、私たちの目指す「授業創り」は、まずは目の前の子どもの姿を教師自身の問題として受け止め、子どもが授業の中で見せている現実の姿を、どのように変えていきたいのかをしっかりと見定めて、授業改善の課題を見い出していくことから出発することが大切であると考えます。

授業というのは実に複雑で多様な要素から成り立っているため、「授業をどう創るか」と問われても、一言で言い尽くせるものではないと考えます。

そのことを前提にしながらも、ここでは、自分の授業を振り返り、新しい授業を創り出すためには、自分の授業を見つめ直す視点をあげてみたいと思えます。

視点に照らして、これまで進めてきた自分の授業実践を振り返りながら、自分の授業改善の課題を見い出し、自分の「授業創り」に役立ててほしいと思えます。

① 子どもの側に立った学習目標になっているか

授業を構想し展開するに当たって、その根底となる学習目標をどのような観点に立って設定してきたのでしょうか。

これまでの私たちの授業を振り返ってみると、学習目標は、学習指導要領の目標、内容



に基づいて、ともすれば私たち教える側（教師側）に立って、何をどの程度教え、身につけさせるかという観点から設定されてきた傾向が強かったのではないのでしょうか。

したがって、学習目標は、「〇〇について理解させる」「〇〇のように活動させる」などと、教師側の一方的な立場に立って、子どもに“させる”ことをねらいとして表現される傾向が見られたのではないかと思います。

授業は、子どもたちの思いや願いと、教師の授業に寄せる願いとが合う場合であり、学習目標はこの両者の願いが実現できるように設定する必要があります。

今、私たち教師に求められている授業は、子ども一人一人のよさや可能性を存分に発揮させ、自ら考え、主体的に判断し行動できる資質や能力を育てていく過程として位置付け、展開していく授業です。

このような授業を実現していくためには、学習目標についても、私たち教師側に立って何をどの程度教え、身に付けさせるかという観点からだけ考えるのではなく、子ども一人一人がよさや可能性を発揮し、主体的に授業に取り組めるよう教師がどのように支援するかという子ども側の観点に立って設定していくことが大切です。

新しい授業創りの第一の視点として、子どもの実態に即した（子どもの側に立った）学習目標になっているか見つめ直すことをあげたいと思います。

② 子どもが自分の学習のめあてをもって授業に参加しているか

子どもの学習への取り組みの姿が受け身なために、どうしても教師中心の指示的・説明的な授業になってしまう・・・こんな悩みをもつ先生方が多いようです。その原因の一つに、子ども自身がしっかりした学習のめあてを持って授業に臨んでいないことがあげられるのではないのでしょうか。

授業を参観していてこんな光景をよく見かけます。

—めあてについて話し合い、一段落したところで、教師がおもむろに準備しておいためあてや学習問題のカードを黒板に提示する。そして、子どもはその教師から提示されためあてをノートに書き込む。しばらくして、教師が「めあてが書けましたか」と確認し授業が進められる。—授業が、教師中心の指示的、説明的になってしまうのも、子どもの学習活動が受け身になってしまっているのも、この辺に問題点が潜んでいるようです。

「授業は“めあて”の把握からスタートする」と言われます。

私たちが目指す授業は、子どもたちの主体的な学習活動を中心に展開されることが基本です。そのためには、子どもたちが学習活動のねらいを自分のものとして理解し、自分なりのめあてをもって意欲的に学習活動に取り組むことができるようにする必要があります。つまり、めあては、教師から与えられるものではなく、自分でつくってはじめて、自分の「めあて」となるのです。

これまでの授業を振り返ってみてどうでしょうか。目の前の子どもたち一人一人が、授業のねらいを理解し、自分なりのめあてをもって学習活動に取り組んでいるのでしょうか。この視点から自分の授業を見直してみることは、子どもの側に立った授業創りを進める上でとても大切なことです。

③ 子どもの思いや願いを生かす学習過程になっているか

せっかく、自分なりのめあてが設定できても、その後の追究活動にあまり意欲を示さないと嘆くことはないのでしょうか。



その原因は、私たち教師側の授業創りに問題があるようです。

案外私たち教師は、どの子にも同じようにねらいを達成させたいと願うあまり、どの子にも同じような学習方法・解決方法で、授業を進めることが多いのではないのでしょうか。そして、その方法が、いつもパターン化してはいないのでしょうか。

このような授業の進め方が、子どもの追究意欲を阻害しているのだと思います。

子どもが主体的に学習活動を展開できるようにするためには、何と云っても子どもの内発的な学習意欲を喚起し、思いや願いなどを授業の中で生かせるようにすることが大切です。

したがって、学習指導計画を立案するに当たっては、子どもたちが主体的に学習活動を展開できる場や機会をできるだけ多く設定し、子ども一人一人の思いや願いなどを生かすことができるようにする必要があります。

このような授業創りをしていくためには、特に次のような視点での取り組みを重視したいと思います。

- ☞ 授業は、子どもが立てた自分のめあてに進んで関わり、主体的に考え、判断したり、表現したりする学習活動を基軸にして展開されるべきものであるという認識に立ち、問題解決的な学習や体験的な活動を積極的に取り入れること。
- ☞ 子ども一人一人の興味・関心などに対応できるよう、学習活動の複数の展開を考えるなど弾力的な指導計画を立案し、授業に臨むようにすること。

④ 子どもが思いを寄せて積極的に関わるような教材を準備しているか

苦勞して教材を準備して授業に臨んだのに、思ったように子どもの思考が深まらないなどという苦い経験をお持ちかと思います。

これまで、教材はどちらかというと私たち教師が教える内容や材料としてとらえる傾向が強かったように思います。つまり、どの子にも同じように一定の知識や技能を身につけさせるためのものとして教材が存在していると受け止められがちであったと言えるのではないのでしょうか。

これからは教材の役割を、「子どもが学習の対象として意識し、意欲をもって深く関わり、自分のよさを十分に発揮しながら学んでいくための、教育的にみて価値のある素材」としてとらえていくことが大切です。

したがって、子どもが主体的に学習活動を展開できるようにしていくためには、その子の思いや願いが生かされるようにする観点に立って教材を工夫することが必要です。

教材を工夫する視点としては、特に次のようなことを重視してみたいかがでしょう。

- ☞ 子どもの興味や関心、思考などが広がるようにする観点から、複数の教材を用意するなどして、子どもの多様な実態に対応できるように工夫すること。
- ☞ 子どもたちの生活を基盤にした学習活動を重視する観点から、地域社会の自然、社会、文化などの素材を教材化したり、地域社会の教育力を積極的に導入すること。

⑤ 友だちや教師との関わりを大切に、授業を進めているか

子どもはだれでも、教師や友だちから自分のよさを認められ、集団の中でよりよく生きたいという願いを抱いています。

これからの社会に生きる子どもたちには、従前にも増して、他との関わりの中で自分の考えをしっかりと持ち、そしてその考えを発表できること、友だちの考えを柔軟に受け止めることができること、また、自他の多様な考えをよりよいものに統合することができることなどの資質や能力を育成することが要請されています。

このような資質や能力は教育活動全体を通して培うことが基本ですが、学校生活の大半を占める授業に課せられた役割は、特に大きいのです。

子どもたちは、授業の中で友だちや私たち教師と関わり合いながら、それぞれのよさを学んでいくものです。相互に支え合い、認め合い、励まし合いながら、豊かな人間関係をつくっていくのです。

したがって、私たちが進める授業では、子どもと教師、子ども相互の関わりを重視して、お互いのよさに共感し合えるような場や機会を多く設定していくことが必要です。そのようなことを重ねていくことによって、子どもは自分のよさが分かるようになり、自分の力を発揮していこうとする意欲や態度が育っていくものなのです。

日々の授業が、友だちや教師との関わりでどう展開されているかは、授業者として大切な自己点検の視点です。



⑥ 子どもの学習活動を充実するために、学習形態や指導体制などの指導法の工夫をしているか

これまでの私たちが進めてきた授業は、ともすると私たち教師があらかじめ予定した学習の仕方を一方的に示し、同一の教材による一斉授業で、子どもたちが同一歩調で取り組むような授業展開を中心としてきた傾向があります。

ここでの子どもたちの学習の姿は、必ずしも主体的ではなく、私たち教師の指示に従った受け身の姿勢になっていたように思います。

今求められている授業は、子どもたちが自らの課題を見つけ、それを追究し解決することができる、子どもの主体的な学習活動を重視した授業です。

このような授業を実現していくためには、子どもたちの主体的な学習活動が成り立つようにする観点から、学習形態や私たち教師側の指導体制の工夫が求められます。

学習形態については、形式にとらわれることなく教科等の特性や学習活動のねらい等に応じて最適な形態を選択し、弾力的に対応していくことが大切です。

また、子ども一人一人が自分のよさや可能性を生かし高めていく学習が一層充実するように支援する観点から、私たち教師側の指導体制を工夫する必要があります。複数の教師が関わるチーム・ティーチングを積極的に取り入れることによって、子ども一人一人のよさや可能性を広くとらえることが可能となり、その子の学習活動を適切に支援することも可能となります。

学習形態や協力的な指導が本当に子どもの学習への思いや願い、学習目標の達成のために効果的に機能するかどうか、授業創りのためには積極的に試み、吟味していかなければならない視点です。

(3) 授業を創る

「授業を創る」アイデアは日々の授業の中にあります。“教師は授業で勝負する”と言われるように、よい授業を積み重ねていくことによって子どもを変えていくことが、今私たち教師に課せられた最大の課題です。

しかし、“よい授業”を創り出すことは、むずかしいことだと思います。理念としては理解できても、方法論としての授業創りとなると、なかなか手をつけられずに悩んでいる先生方が多いのではないのでしょうか。

そこで本書では、いくつか示した授業を見つめ直す視点を踏まえながら、先生方が授業創りを進めていくうえで悩まれている

- ・ 子どもの思いや願いに応える多様な授業をどう構想するか
- ・ 構想に基づいて、授業展開をどのように工夫すればよいか

という観点から、特に大切に考えていきたい内容を取り上げ、一緒に考えてほしいと願っています。

ところで、本書は次のような3つの柱から構成されています。

- I 児童生徒が自ら学ぶ授業をどう創り出すか
- II 一人一人を生かす授業をどう創り出すか
- III 21世紀に向けた新しい授業をどう創り出すか

日々の授業の活性化や質的改善を進めていくうえで、確実に手ごたえのある内容を取り出し、各柱ごとに6～7点の視点を掲げて提案してみました。

これらの「授業を創る」視点は、体系的・論理的でない面もありますが、先生方の今の授業を質的に改善していくうえで、必ずや役に立つものになると確信します。

今、私たちには、授業を変える具体的な「手」を打つことが強く求められています。多くの学校や教室で、本書「授業を創る」が活用され、授業改善への広がりにつながることを期待いたします。

〔授業を創るチャレンジの視点〕

I 児童生徒が自ら学ぶ授業をどう創り出すか

- ☞① 体験的な活動を重視して授業を創る
- ☞② 問題解決的活動を大切に授業を創る
- ☞③ 教材提示の工夫で授業を創る
- ☞④ 学習の仕方の定着で授業を創る
- ☞⑤ 学習意欲が持続する授業を創る
- ☞⑥ 学習の複線化を考慮して授業を創る

II 一人一人を生かす授業をどう創り出すか

- ☞⑦ T・Tの導入で授業を創る
- ☞⑧ 子どもの自己評価を生かして授業を創る
- ☞⑨ 個に応じた支援ができる授業を創る
- ☞⑩ 個人カルテの活用で授業を創る
- ☞⑪ S-P表の活用で授業を創る
- ☞⑫ コンピュータの活用で授業を創る
- ☞⑬ 学習形態の工夫で授業を創る

III 21世紀に向けた新しい授業をどう創り出すか

- ☞⑭ クロスカリキュラムを作成して授業を創る
- ☞⑮ 環境教育を意識した授業を創る
- ☞⑯ 国際理解に通じる授業を創る
- ☞⑰ ロールプレイングを導入して授業を創る
- ☞⑱ 家庭や地域の教育力を生かして授業を創る
- ☞⑲ 授業時間の弾力化を図って授業を創る
- ☞⑳ 感動と共感で授業を創る

① 体験的な活動を重視して授業を創る

学習指導要領の「総則」に、「各教科等の指導に当たっては、体験的な活動を重視するとともに、児童（生徒）の興味や関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるよう工夫すること。」とあるように、体験的な活動を積極的に組み入れていくことが強く求められています。

体験的な活動を組み入れた授業においては、子ども一人一人が自分の興味や関心、持ち味などの個性を發揮しながら、学習に主体的に取り組むようになり、次のような有効性が期待できます。

- 学習意欲が喚起される。
- 主体的な学習の仕方が身に付く。
- 思考や感情がゆさぶられ、思考や感情が高まっていく。
- 学ぶことの楽しさや成就感、効力感が感得できる。



体験的な活動を、どのように組み入れると効果的かを考えると、およそ次のような3つの場面が適当ではないかと思えます。

《学習課題をとらえる段階》

実際に体験的な活動に取り組む中から、様々な疑問や感想などを出し合ったり、学習の不十分さや問題点などに気付いたりしながら、自分の課題を見出し、これからの学習の内容や方向を決めていくことができます。学習の初期における「体験」は、その後の学習に対する関心や意欲を高める役割を持っています。

《学習課題を解決していく段階》

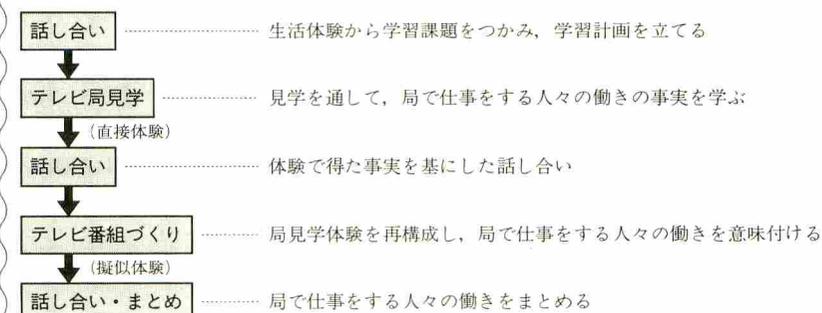
体験的な活動を通して、新たな事実の認識を深めたり、自分の思いや願いを發揮したりしながら、自分の疑問や予想が確かめられ、学習課題の解決を図っていくことができます。

《学習のまとめをする段階》

ここでの体験的な活動は、学習課題を追究し明らかになったことを、まとめたり確認したりすることを主なねらいとしています。体験を通して、学習のねらいとしているものを自分なりに最終的に獲得し、定着を図ることができます。また、体験を基にした表現活動や話し合い活動を行うことにより、学習の成果を整理するだけでなく、今後に残された問題を明らかにすることもできるようになります。

【体験的な活動を重視した実践例】 ——小学校5年・社会「放送局で働く人々」——

本事例は、子どもがテレビ局見学で学んだことや体験したことを再構成して意味付けていくために、見学後に「自分たちのテレビ番組づくり」を位置付け、番組制作の活動を通して、自分なりに考えたり判断したりしながら、体験で得た事実を確かめることができるように意図して実践されたものです。



具体的には、次のような計画のもとに実施されています。

時	主な学習活動・内容	体験的活動等に対する教師の支援
1	○ 私たちは情報を何からどのように得ているか話し合い、学習計画を立てる。	・自分の生活体験から学習課題をつかむことができるようにする。
2 3 4	1. テレビ局を見学して、番組ができるまでを調べる。 2. スタジオで、テレビ局のスタッフや出演者になって、番組制作を体験する。 (※ 局において可能であれば)	・自分なりのめあてを持って見学できるようにする。 (見たいこと、聞きたいこと、体験したいこと) ・本物の体験を十分楽しませたい。 ・体験をもとに、局で働く人々の工夫や努力、願いについて調べることができるように支援する。
5	1. 見学の感想を話し合う。 2. 番組制作の仕組みや工夫、努力について話し合う。 3. テレビ局で働く人々の願いについて考える。	・調べたことや体験を振り返り、より速く、より正確に情報を伝えるための仕組みや工夫、努力、願いについて、事実を基に話し合わせるようにする。
6 7	1. 番組制作の計画を立てる。 2. 番組作りの取材をする。 3. 番組の台本、進行表を作る。	・「自分たちでもテレビ番組を作りたい」の希望を生かし、番組作りのジャンルごとに班編成して番組制作に挑戦させる。 ・各班プロデューサーを中心に協力して活動できるよう支援する。 ・取材活動では、できるだけ子どもたちの願いが叶えられるよう支援する。
8 9 10	1. 本番前のスタッフ会議をする。 2. 番組収録の準備をする。 3. 班ごとに番組を収録する。 4. スタッフ会議をする。	・各係の準備がスムーズにいくように支援する。 ・ギャラリーの子どもたちには、各係の動き、協力の様子に注目するようながす。
11	1. 番組作りを終えての感想を話し合う。 2. 放送局で働く人たちの働きについて自分たちの番組作りの体験と比較してまとめる。 3. これからの情報の使い方について考え、話し合う。	・活動や体験を基に自由に発表する。 ・情報についての見方、考え方がどのように変わったか話し合う。 ・様々な情報の中から自分に必要なものを選び、それをどのように活用するかについて話し合う。

【体験的な活動を組み入れた授業創りのポイント】

1 複数の体験的な活動を組み入れる

体験的な活動を整理すると、およそ次のようになります。

- 実際にやってみる（製作、操作・構成、飼育・栽培）活動
- まねてやってみる（模擬、追体験、ごっこ、劇化）活動
- 調査して調べる活動
- 実験して確かめる活動
- 実際に見てみる（観察、見学）活動
- 作品にまとめる活動

実際の授業では、これらの活動が一つ一つ単独に行われるよりも、むしろ複数の体験的な活動を組み合わせながら、学習を展開していった方が効果的です。

2 子どもの発想と実践を大事にした「本物の体験」を展開する

体験的な活動は、子ども自身が喜んで体験でき、成就感が味わえるように展開していくことが第一です。そのためには、体験的な活動そのものが、子どもの学習意欲を誘発し、活動そのものに没頭することができるように体験への動機づけを図っていくことが大切です。

3 体験を深めていけるような活動を展開する

体験のさせっぱなしでは知識や技能の習得には結び付きません。体験的な活動の後に、学んだことや経験したことをお互いに交換したり思考を深め合ったりする場を設けていくことが大切です。

よく、「記憶したことは忘れるが、体験したことは忘れない」と言われます。また、子どもには「体験を通して思考する」という特性があります。このような意味からも、体験的な活動を重視した授業創りを自分の授業改善の課題として掲げ、取り組んでほしいと思います。

② 問題解決的活動を大切にして授業を創る

課題

小学校5年・社会の授業が始まろうとしています。

先生の机の上には、漆器が2つ置いてあります。

先生は次のように言いました。



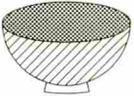
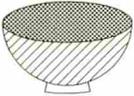
「さて、これは皆さんが食事の時に使う『おわん』ですが、この2つの『おわん』それぞれの値段はどれくらいでしょう。」

子どもたちは、「えーっ、わかんない」「500円」「1000円」などと言っています。

「実際に手にとって、A、Bの『おわん』の値段を予想して、ノートに書きましょう。」と先生が言うと、子どもたちは友だちと相談しながら、ノートに2つの「おわん」の値段を書き込んでいきました。

これは、「伝統的な技術をいかした工業」の単元の導入の場面です。

実は、2つの「おわん」は、次のような「おわん」です。

Aの「おわん」	Bの「おわん」
 <p>子どもが予想した 値段の平均 3700円</p> <p>本当の値段=400円</p> <p>木地はベークライトで肉厚 塗料は化学塗料 模様はプリントで豪華に見える</p>	 <p>子どもが予想した 値段の平均 560円</p> <p>本当の値段=5000円</p> <p>木地は木で薄手 塗料は漆 模様は「会津金虫喰」で素朴</p>

ほとんどの子どもたちが、Aの「おわん」に高い値段を付けて、Bの方には安い値段を付けました。

子どもたちは、肉厚で重く、模様が豪華でピカピカ光るベークライトの「おわん」の方の値段が高いと考えたようです。

ところが、先生が、「この2つの『おわん』の本当の値段はね、Aが400円で、Bが5000円なんです。」と、値段を明かしますと、学級は大騒ぎになりました。

このような活動から子どもたちは次のような学習課題を作りました。

この「おわん」は、どうしてこんなに高いのだろうか。

問題解決的活動を大切にして授業を創ろうとする場合、最も大切なことは、子どもたち一人一人が問題意識を持つということです。問題意識を誘発することができれば、ねらいとする授業のおよそ半ばを達成したと言えるかもしれません。

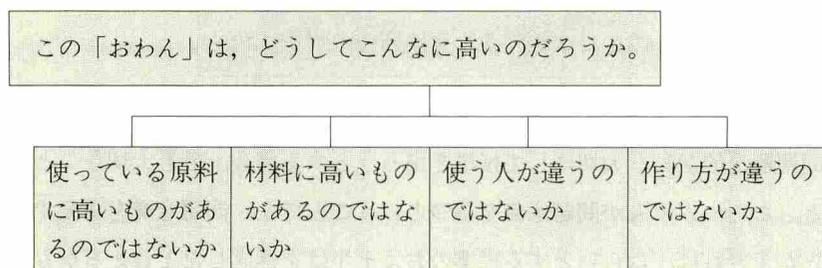
問題意識を誘発するには、次のような視点からの教材研究が必要です。

- 1 興味・関心を大切にした問題（事象）の提示、導入をする。
- 2 驚き、疑問、矛盾、対立、利害などの要素を含んだ導入をする。
- 3 調べたい、やってみいたいなどの気持ちを引き出す導入をする。
- 4 能力に照らして、やさしすぎなく、難しすぎない内容で導入する。
- 5 既習事項や既有経験が生かせる導入をする。

さて、以上のような単元への導入は、「自動車をつくる工業」などの近代的な工業の学習の先にするか後にするかで、その扱い方が変わってきます。すでに「自動車をつくる工業」などの学習が終わっているときには、この単元の導入において、子どもたちに「A、Bどちらのおわんを使いたいか」を尋ね、その理由をノートに書いておくと、単元のまとめの時に活用できます。

漆塗りの「おわん」が予想より高かったことで、子どもたちは、「どうして、こんなに変な模様で、薄い『おわん』が高いの?」という疑問を持つと同時に、そのわけを知りたいという気持ちになったようです。

そこで、先生は、その木製の漆塗りの「おわん」が高い理由を考えてみるよう働きかけてみました。次は、子どもたちが考えた理由です。



こうした子どもたちのそれぞれの理由の話し合いをもとに、学習の計画を作ります。そうすることで、子どもたちの学習は「自らが気付いた問題を、自らの見通しで、自らの力で解決していこうとする」問題解決的な活動になっていきました。

追 究

子どもたちの「何かおかしい」「調べてみたい」などの問題意識が持続するように追究活動を支援していきたいのですが、その場合の学習活動には様々な形態が考えられます。

ここでは、3つの追究形態を例示します。

- 1 子ども一人一人の問題意識を大切に、それぞれの予想や調べ方で追究する。
- 2 子ども一人一人の問題意識を学級全体で集約し、共通課題を設定して追究する。
- 3 同じような問題意識を持つ子どもが数人でグループを作り、協力しながら追究する。

問題意識を持ち、追究の見通しが持てることは極めて大切なことですが、その後の追究活動を活発にするためには、問題解決のための適切な資料や活動を準備することが大事です。

問題解決的な活動を大切にしようとするならば、問題解決的な活動が促進されるような学習環境を整えていく必要があります。

たとえば、先の「伝統的な技術をいかした工業」の学習を例にすると……

- ☞ 各地の伝統的な技術を生かした工業製品のパンフレットなどを集めておき、子どもたちが自由に見られるようにする。
- ☞ 会津漆器に関する製作工程や統計資料などを印刷しておき、必要な資料を自由に取り出したり、切ったり、貼り付けたりすることができるようにする。
- ☞ パソコン（関係ソフト、インターネットを含む）、VTR、FAXなどが利用できるようにする。

まとめ

学習していることが最終的にどうまとめられるかは、問題解決的な活動の成否に大きな影響を与えます。「どうまとめるか」については、できれば、学習計画を立てる段階で決まっていることが望ましいと考えます。問題解決的な活動を促進する次のような「まとめ」はどうでしょうか。

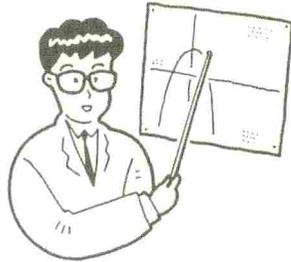
- ☞ 個人あるいはグループでパンフレット、新聞などを作る。
- ☞ パンフレット、新聞などを他校、あるいは工業従事者に送る。
- ☞ 授業参観や学習発表会で学習成果を発表する。
- ☞ 他の学級の子どもたちとノートの交換をし、感想文を書く。



「A、Bどちらの『おわん』を使いたいか」を、単元の導入の時に考えていますので、学習後にも聞いてみます。大量生産の安い「おわん」が人々の豊かな生活を願って生産されていること、伝統的な技術を生かした工業製品には、それとはまた別の価値があること、A、B両方の製品の意味や価値を理解した上で考えをまとめることは、次の問題解決の意欲にもつながると考えます。

③ 教材提示の工夫で授業を創る

「今日のめあては、〇〇〇〇です。」
 「〇〇〇〇について、考えてみましょう。」
 「〇〇〇〇は、〇〇〇〇すると、〇〇〇〇ですね。」
 「わかりましたか。」



教師が、一生懸命授業を進めようとしているにも関わらず、子どもたちは興味を示さず、活動も低調気味。そんなとき、「なぜだろう?」「どうすればいいんだろう?」と悩んだ経験はありませんか。

授業は、子どもにとって「分かる授業」「楽しい授業」でなければなりません。

そんな授業を創るためには、綿密な教材研究と授業設計が大事になります。どんな教材を(教材の選択)、どこで(機会の選択)、どのように(方法の選択)提示するかという「教材提示の工夫」は、授業創りに当たって大切なポイントとなります。

では、教材提示をどのように工夫すれば「分かる授業」「楽しい授業」が創り出せるのか、実践例をもとに具体的に考えてみましょう。

【実践例】 一小学校1年・算数

- 1 単元名 「かたちづくり」
- 2 単元の目標 (略)
- 3 本時の目標

- 形の仲間分けができる。 **【知識・理解】**
- 分けた形に名前をつけることができる。 **【数学的な考え方】**
- モールで、三角、四角、丸をつくることができる。 **【表現・処理】**

4 展 開

区分	時間	学 習 の 流 れ	指導上の留意点 ◇評価
導 入	15	1 [教材提示] OHP 直線、曲線図形の違いを調べる 各自、色板で分類する 評価	<OHP>  ○ なぜ同じ仲間、違う仲間に入るか線に注目して考えられるようにする。 ○ 掲示用色板、児童用色板を準備する。 [補] OHPをもう一度見るようにする。 ◇ 机間指導しながら図形の特徴をつかむようにする。
	15	2 [教材提示] 色板 色板で形の特徴をつかみ、名をつける 調べたものに名前をつける 評価	○ 代表的な特徴を話し合っている。 ○ かど、へりの数によって違う名がつけられることに気付くようにする。 ◇ 仲間分けできない子どもには、別の教材を準備して抵抗を取り除いてやる。
展 開	10	3 [教材提示] モール モールでつくった平面図形を見てつくり方を考える モールで三角、四角、丸をつくる 評価	○ まっすぐな線、曲がった線の違いを考えながらつくれるようにする。 ○ きちんと折り曲げて、三角、四角を、丸はモールをたわめてつくれるようにする。 ◇ モールを使って、まっすぐな線、曲がった線に囲まれる形になるよう工夫できるようにする。

どんな教材を使えば効果的か

(教材の選択)

指導計画を立てる段階で、子どもが行う平面図形と立体図形の弁別についての実態把握を十分行い、その上で、子どもが興味をもって活動する具体物等の教材を準備し、操作活動を取り入れたことは、発達段階や興味・関心等を考慮した教材の選択と言えます。

では、どんな教材を使えば効果的か「教材選択のポイント」をいくつかあげてみましょう。

【教材選択のポイント】

- 子どもの能力に即し、考える活動を発展させ、学習目標の達成につながるもの
- ねらいとする指導内容を含み、個々の子どもに理解でき、かつ、活用できるもの
- 適度な抵抗感があり、子どもの興味・関心を引くもので、学習意欲を高める上で役立つもの
- 子どもの発達段階や特性に合っているもの

どんな方法で提示すれば効果的か

(方法の選択)

この事例では、どの子も自分から取り組み、楽しく学習できるように、教育機器や具体物を用いるなどの工夫をしています。これは、低学年の図形の指導において、絵だけではなく、実物に触れることによって図形の概念が得やすいことを考慮してのものです。

ここでの色板やモールの活用（並べたり、集めたり、折ったり、曲げたり

すること）は、子どもの考える活動を発展させるために役立ち学習目標の達成につながると考えます。

また、OHP等の機器の活用は、子どもの興味・関心を引き、学習意欲を高める上で効果的であるばかりでなく、授業の効率化を図る上でも効果的と言えます。

このように考えると、教材提示の方法についても一工夫することが大切なことです。

【教材提示の方法】

- 視聴覚的方法による提示
- 実演による提示
- 実物（具体物）を使っの提示

いつ提示するのが効果的か

(機会の選択)

導入段階で、OHPを用いて、直線・曲線図形の提示を行ったことは、学習意欲を高める上で役立つといえます。また、図形の仲間分けができない子どもに対しても、別の教材を準備するなどの配慮がなされ、授業のねらいをとらえる（問題意識を持つ）上からも効果があったと言えます。

展開の段階で、教材として色板やモール等の具体物を準備し、操作活動を通して子どもの思考活動を助けたことは、子どもの発達段階を考えた教材提示だと言えます。……

教材提示を工夫することは、「分かる授業」「楽しい授業」創りの出発点となります。

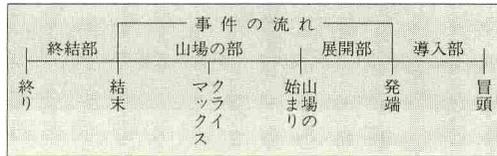
④ 学習の仕方の定着で授業を創る

子ども自身に学習の仕方が身に付いていれば、自分で主体的に学習を進めることができ、活発な授業を展開することができます。

例えば、小学校・国語の物語文の学習で人物の気持ちや場面の様子を読み取るときに、子どもたちが次のような文章の読み取り方を繰り返し経験し、身に付けていけば、読み取りの学習も今まで以上に楽しくなるでしょう。

① 文章の構成を理解する

- 作品には必ず事件（大きな出来事）があり、導入—展開—終末という流れの中で、山場を迎え、主人公の気持ちが変わっていくこと。



② 書かれていることを正しく読み取る

- 気持ちを読み取るには、会話、行動、情景に着目して読み取ること。
- 様子を読み取るには、時、場、状態に着目して読み取ること。
- 「読み取りの方法」には、下記のような方法があること。

〈読み取りの方法〉

書き込み	行間に気持ちや様子等、想像したことを書く。
吹き出し	吹き出しに想像したことを書く。大きな吹き出しには強い気持ち、小さな吹き出しには気持ちの変化を書く等、吹き出しの大小にも注意する。
インタビュー	気持ちの表れている部分に着目して質問を考え、それに答える形で気持ちを想像して書く。
日記	登場人物になって、気持ち、場面の様子等を想像して書く。
図表	文章に即して気持ちや様子を整理し、図や表に表す。
心情曲線	登場人物の気持ちの変化、高まりの具合をグラフ化する。
音読記号	気持ちや様子を想像してどう読むか考え、音読記号を入れる。

ここでは、「吹き出し法」「図表法」「心情曲線法」の読み取りの方法を使って文章を読み取る授業の実践を紹介します。

1 単元名

人物どうしの結びつきを「花と手品師」（小学校6年・国語 光村図書）

2 本時の目標

おじさんからの贈り物の種が開花するまで世話をする「ぼく」の様子や行動を順序よくとらえ、花が咲くのを楽しみに待ち、細やかな心遣いをする「ぼく」の気持ちを読み取る。

3 指導過程

時間	学習活動・内容	指導上の留意点
5分	1 課題を確認する。 おじさんから贈られてきた種を育てていく「ぼく」はどんな気持ちなのだろう。	○今年の贈り物がこれまでの贈り物と違うことから特別の意味があることに気づき、読み取る意欲が高まるようにする。
20分	(2) 読み取りの方法を選択して、黒い種を育てていく「ぼく」の気持ちを読み取る。 ・円く石で囲む ・たっぷり水をかけて ・毎朝、庭に出て ・ずいぶん心配して 〈読み取りの方法〉 ・書き込み法 ・吹き出し法 ・インタビュー法 ・図表法 ・心情曲線法 等	○各自の読み取りの能力に応じて、これまで経験した読み取りの方法が活用できるように支援する。 ・様子や気持ちを表す言葉に気付くことが苦手な児童には、文章にサイドラインを引き、行間に思ったことをメモする「書き込み法」により読み取れるように助言する。 ・「書き込み法」がスムーズにできる児童には、「吹き出し法」により思ったことを抜き出す方法に挑戦するよう働きかける。 ・様子や気持ちを表す言葉が見つけられる児童には、「図表法」により整理し、関連して読み取れるように支援する。 ・活用経験の少ない「心情曲線法」により、人物の気持ちの変化を読み取ろうとする児童には、「手引き」を示し、読み取りがスムーズに行えるようにする。

4 児童の読み取りの実際

【図表法】

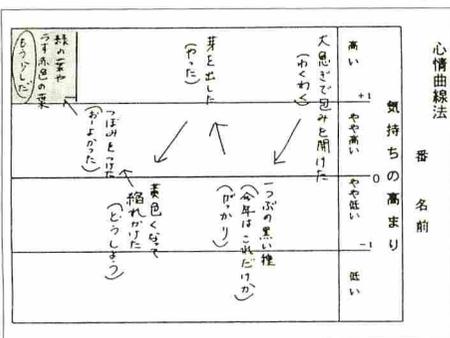
花を世話する主人公の様子を叙述に即して抜き出し、言葉の意味を確かめながら読み取っていた。(C₁)



【心情曲線法】

芽を出し、花が咲くまで細やかに世話をする主人公の気持ちの高まりを表にまとめ、読み取っていた。(C₃)

〈ワークシート〉



「ぼく」の気持ちがどのように書かれていたかを読み取る段階

C₁ (「図表法」を選んだ児童の読み取り)

「『ちよっぴり葉が黄色くなったのを見て心配しました。』から、とっても種を大切に、絶対にさかせてみようという気持ちがあったと思います。」

C₂ (「吹き出し法」を選んだ児童の読み取り)

「『周りを円く石で囲む』にもその気持ちがあったと思います。また、『7日目に

〈ワークシート〉

図表法	番号	名前
花を世話する主人公の様子を叙述に即して抜き出し、言葉の意味を確かめながら読み取っていた。(C ₁)	1	山田 太郎
芽を出し、花が咲くまで細やかに世話をする主人公の気持ちの高まりを表にまとめ、読み取っていた。(C ₃)	2	佐藤 花子

〈読み取り方法の手引き〉

心情曲線

「心情曲線」って何ですか。
登場人物の気持ちの変化を、文章をよく読みとり、楽しい気持ち、悲しい気持ち、落ち着いた気持ちなどの気持ちを考え、その程度を表に表します。このことで、気持ちの変化がとらえられ、深く読みとることができるのです。

① 登場人物の気持ちの変化が分かるといえるとき
② 気持ちの変化のきっかけとなるできごとが見つけやすいとき
③ 気持ちの変化を表す語句や文が見つけやすいとき

④ 登場人物の気持ちの変化が分かるといえるとき
⑤ 気持ちの変化のきっかけとなるできごとが見つけやすいとき
⑥ 気持ちの変化を表す語句や文が見つけやすいとき

やりかたは、どうするのですか。
① どの気持ちは読みとるのか決めます。② その言葉や文について書くのか決めます。③ 次のような表をつくり、書き入れます。

とびあがり	うれい	なみだが
うれい	うれい	なみだが
なみだが	なみだが	なみだが
なみだが	なみだが	なみだが

心情曲線とは、気持ちのレベルが上がり、下がるといえるとき、その変化をグラフで表すことです。

芽を出しました』には、毎日、日数を数えながらくわしく、待ち遠しい気持ちで、花を見ていた気持ちがあると思います。」

C₃ (「心情曲線法」を選んだ児童の読み取り)

「『緑の葉やうす赤色の葉』からくわしく見るばかりではなく、もう少しだがんばれという気持ちの高まりがあったと思います。」

この実践では、「図表法」を選んだ子どもは言葉の意味を確かめ合う場面でも、「心情曲線法」を選んだ子どもは、主人公の心情を深め合う場面でも多く発表していました。子どもたちが、これまで経験した学習の仕方(「読み取りの方法」)を現在の学習に生かすことができたと思われます。

また、「手引き」の活用により、学習の仕方の定着が図られています。

実践例は小学校・国語の場合ですが、どの教科においても学習の仕方の定着が授業を創る際に重要なことです。

〈学習の仕方の定着で授業を創る際のポイント〉

1 これまでの学習の内容や方法を、現在の学習、これからの学習に生かす。

実践例のように、これまで学習してきた内容や方法が、現在の学習に生かすことができ、さらにそれをこれからの学習に生かすことができるように年間及び単元の指導計画の中で学習事項を明確にするとともに、繰り返し経験できるようにすることが大切です。

2 子どもたちの個人差に合った学習の仕方が身に付くようにする。

読み取ったことを簡条書きにまとめたり、図や表でまとめたりと、子どもたちは、それぞれ自分の得意の学び方を持っています。その特性を生かしていくことが授業創りの上では大切なことです。

3 「手引き」等の活用により学習の仕方が想起できるようにする。

これまで学習した内容や方法が思い出せない場合があります。これまでの学習の内容、方法のポイントがまとめられている「手引き」等があれば、子どもたちはスムーズに学習を進めることができます。

⑤ 学習意欲が持続する授業を創る

小学校3年・理科「明かりをつけよう」の単元導入で・・・

子ども一人一人に豆電球1個，乾電池1個，ビニル導線1本をそれぞれ渡して，

T「さあ，これを使って豆電球の明かりをつけてみよう。」

C「えっ，これだけじゃつけられないよ。」

C「先生，ビニルの導線を切ってもいいんですか？」

T「切らないでつけてみましょう。」

C「先生，そんな・・・。」

C「先生，これだけで本当につけられるの？」

T「だいじょうぶ。これだけあればつけられるんだよ。さあ，がんばってつけてみよう。」

教師のこの言葉に促されて，子どもたちは「よし，絶対につけてやるぞ！」と課題解決に向けて意欲を高め，試行錯誤しながら，根気強く取り組んでいた・・・。

「授業は，子ども自らの意欲を基盤として進められなければならない。」と言われます。

私たちの目の前の子どもは，元来新しい事柄や不思議なできごとに出会うと，「おや何だろう」「本当にそんなことあるの」「どうしてそうなっているのかな」といった好奇心を示します。

しかし，子どもが元来持っている好奇心も，単なる好奇心ではなく「知的好奇心」にまで高まらなければ，子ども自らの意欲を基盤とした授業を実現することはできません。

《意欲的に学ぶ子どもの背景にあるもの》

子どもたちが自ら求めて意欲的に学習に取り組んでいる背景には，どんなことがあるのでしょうか。各学習段階に即して考えてみましょう。

〔課題を把握する段階〕

資料との出会いなどから生まれた追究意欲のもり上がりがある

「えっ，本当?」「どうしてそうなっているのかな?」など，子どもが疑問や矛盾を感じたとき，学習意欲をかき立て，自ら求めて学習に取り組むようになります。

〔課題解決の見通しを持ち，追究する段階〕

自分なりの考え・方法で追究しようとする構えをもっている

「こうすればできそうだ」とか「今日はこのようにしたい」などと，自分なりの見通しを持って追究に取り組んでいるときの子どもの姿は，実に意欲的で生き生きとしています。

授業の節々において何を学習しているのかを自覚している

導入時における課題意識を，解決の場面にまで持続させて学習活動に取り組んでいる子どもの背景には，今，何を学習しているのか，何が問題になっているのか，何をどう解決しようとしているのかを自覚し，確かな学習意識を持って，その子なりに追究している姿があります。

〔学習のまとめをする段階〕

自分の進歩のあとを実感している

子どもが学習への喜びを感じながら，より高い価値へ向かって取り組むのは，「失敗したり，つまづいたりしたが，とにかく自分の苦労を通してここまでできるようになった。」というように，自己の学習が少しずつ充実したものに向かっていることを自覚したり，よくなりつつあることが実感できたときです。そして，そこから一層高い価値を目指そうとする意欲もわいてきます。



《子どもの学習意欲が持続する授業の構想》

段階	意欲的に学ぶ子どもの姿・意識	教師の支援
課題把握	<ul style="list-style-type: none"> ☞ 事象に敏感に反応し、学習課題を見つけようとする。 ・えっ、そんなことあるの。 ・あれ、考えたことと違うぞ。 ・どの問題を調べていけばいいのかな。 [問題意識] ・これから調べていくのはこの問題だな。 [課題意識] ・よし、早く調べてみよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 事象提示を工夫する。 ・新鮮さがある、問題がはっきりしている、矛盾を感じる等 ○ 子どもの疑問やつまづきを取り上げて課題づくりに生かす。 ○ 価値ある課題への焦点化を図っていく。 ・活動を通して課題化を図る。 ・話し合いにより課題を練り上げる。
見直し	<ul style="list-style-type: none"> ☞ 課題についての予想、解決の方法を考える。 ・～が～だから、もしかすると～かもしれないぞ。 ・～さんの考えはいいな。 ・あのことを使えばできそうだな。 ・この前の～の方法で調べるとうまくいくぞ。 [方法意識] 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもの願いや方法を大切に、幅のある追究計画を用意しておく。 ○ どの子も予想できるように、資料を準備したり、表現活動を取り入れたりとして支援する。 ○ 既存の経験や既知事項をもとにして、その子なりの根拠ある予想を立て、どの方法がよいか吟味できるように支援していく。
追究	<ul style="list-style-type: none"> ☞ 自分の考えた方法で課題を調べ解決する。 ・～で調べてみたら、こんなことが分かった。 [内容意識] ・やっぱりそうだった。もっと調べてみよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ じっくり取り組める時間や場を保障し、子どもの要求に応えられる素材等の準備を十分に行う。 ○ つまづいている子には、補助資料を与えたり、友だちの考えを紹介したり、ヒントカードを提示したりして課題解決への意欲が消失しないように支援していく。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ☞ 課題に沿って学習のまとめをする。 ・こんなことが分かったぞ。 ・～と～では、こういうわけがあったのか。 [成果意識] ・～のことは分かったけど、～については分からないから調べてみたいな。 [新しい問題意識] 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発表の機会を設け、集団の中でより確かなものに練り上げる。 ○ 自分の学習を振り返る場を設定し、自己の高まりを自覚できるようにする。 ○ 子どもの活動の中から残された問題、もっと調べたいこと等を取り上げ、次時への学習意欲を喚起できるようにする。

子どもの意欲を高める視点
<ul style="list-style-type: none"> ◎ 学習意欲を、いかに子ども自らが生み出せるか ☞ 子どもを“ゆさぶる”教材・資料提示を 子どもは、提示された教材・資料と、今まで自分が抱いていた前体験とが異なっているとき、大きくゆさぶられ、自問自答を繰り返し、意欲をもち上げます。 ☞ 努力しがいのある課題の把握を 自分の能力を精一杯使って努力し、それが成功と結び付いた場合でなければ、自分の力でやり遂げたという充実感は味わえません。その子にとって、真に努力しがいのある課題把握が、子どもの挑戦意欲を誘発します。
<ul style="list-style-type: none"> ◎ 学習意欲を継続して、いかに自分の課題解決に取り組むことができるか ☞ 自分なりの見通しが持てるような支援を 子どもが意欲的に課題追究するためには、しっかりと自分なりの見通しを持っていることが必要です。課題をはっきりと意識し、「ぼくはこう思う」「こうすればできそうだ」という自分なりの見通しが立ってこそ意欲的な追究活動に結び付いていくものです。 ☞ 自分なりに追究していく場を 自分なりの見通しが持てれば、それを生かす場が必要になってきます。その子の考えた筋道で、その子の考えた方法で、その子の考えた計画で追究できるような場を保障していくことが、その子の追究意欲を高め、ねばり強く取り組むことにつながります。 ☞ 友との交流を深めて追究できる雰囲気醸成を 互いに認め合い、励まし合う温かい雰囲気の中で授業が展開されれば、みんな学習していくことの喜びを感じ、学習意欲も高まります。 ☞ 表現活動を中心に据えた展開の工夫を 子どもの追究意欲を持続させていくためには、表現活動を中心に据えていくことが効果的です。表現していくうちに内容が深まり、よりよい表現を求めていくことで追究意欲が高まっていきます。
<ul style="list-style-type: none"> ◎ 自分の学習の高まりを実感しながら、いかに学習意欲を広げていくか ☞ 自分の進歩のあとが実感できる自己評価の工夫を 自分の考えが絶えず変わっているということを実感することで、子どもの学習意欲は強化されます。そのためには、自己の学習を振り返りながら「ここまでは分かった、できた。次は・・・」と、自分で自分の進歩に気づき、自分で納得しながら取り組んでいけるような自己評価の場を毎時の授業に組み入れて、どの子も学習前と学習後の進歩の状況を自らとらえられるようにしていくことが大切です。自分の学習の高まりを実感できれば、子どもの問いは自ずと広がり、次の学習へのステップとなります。

⑥ 学習の複線化を考慮して授業を創る

小学校6年・理科の「ものの燃え方」の授業で、集気びんの中で物を燃やす実験の時に、子どもが考えた課題解決の方法に基づいて、ろうそく、線香、割り箸を燃やして調べる複数コースを設定して展開しました。

その結果「線香は僕たちの班だけだったので真剣にできた。」「割り箸がなかなか燃えないので苦労した。」など、子どもが意欲的に学習に取り組んだことが分かる感想からも、学習を複線化した成果がみられた実践と言えるでしょう。

このように、子ども自身が課題を持ち、自分の解決プランに従って、教師の支援を受けながら主体的に学習できる、「学習の複線化」を考慮した授業を創ることは大切なことではないでしょうか。

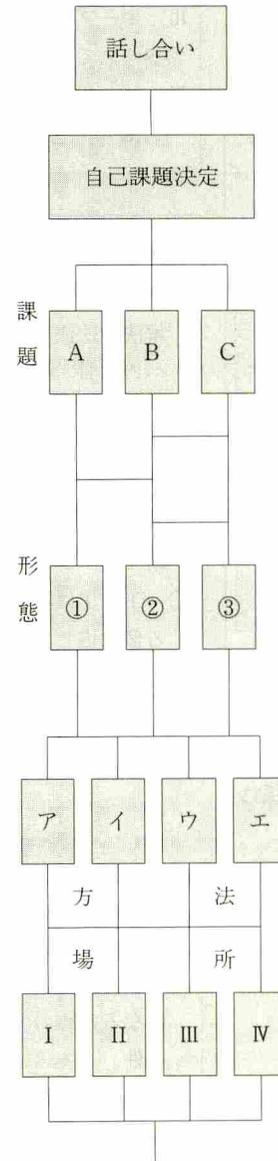
ここでは、中学校2年・数学の「四角形の性質」の授業で、複線化を考慮して生徒がそれぞれの自己課題の解決にゆとりを持って取り組んだ例を紹介します。

「四角形の性質」の学習では、①平行四辺形の性質、②平行四辺形になるための条件、③特別な平行四辺形という教科書の順序で、教師が中心となり学習を進めることが多いのではないのでしょうか。しかし、そのような授業の展開を行っていたのでは、子どもの主体的な学習には結び付かないし、学び方を体得していくこともできないように思います。

そこで、平行四辺形にとらわれず、いろいろな四角形の性質やその証明、それぞれの四角形になるための条件や相互関係などについて、生徒一人一人が課題を設定して解決するまでを、複線化を考慮して展開するようにしました。



【複線化の構造図】



【展開】

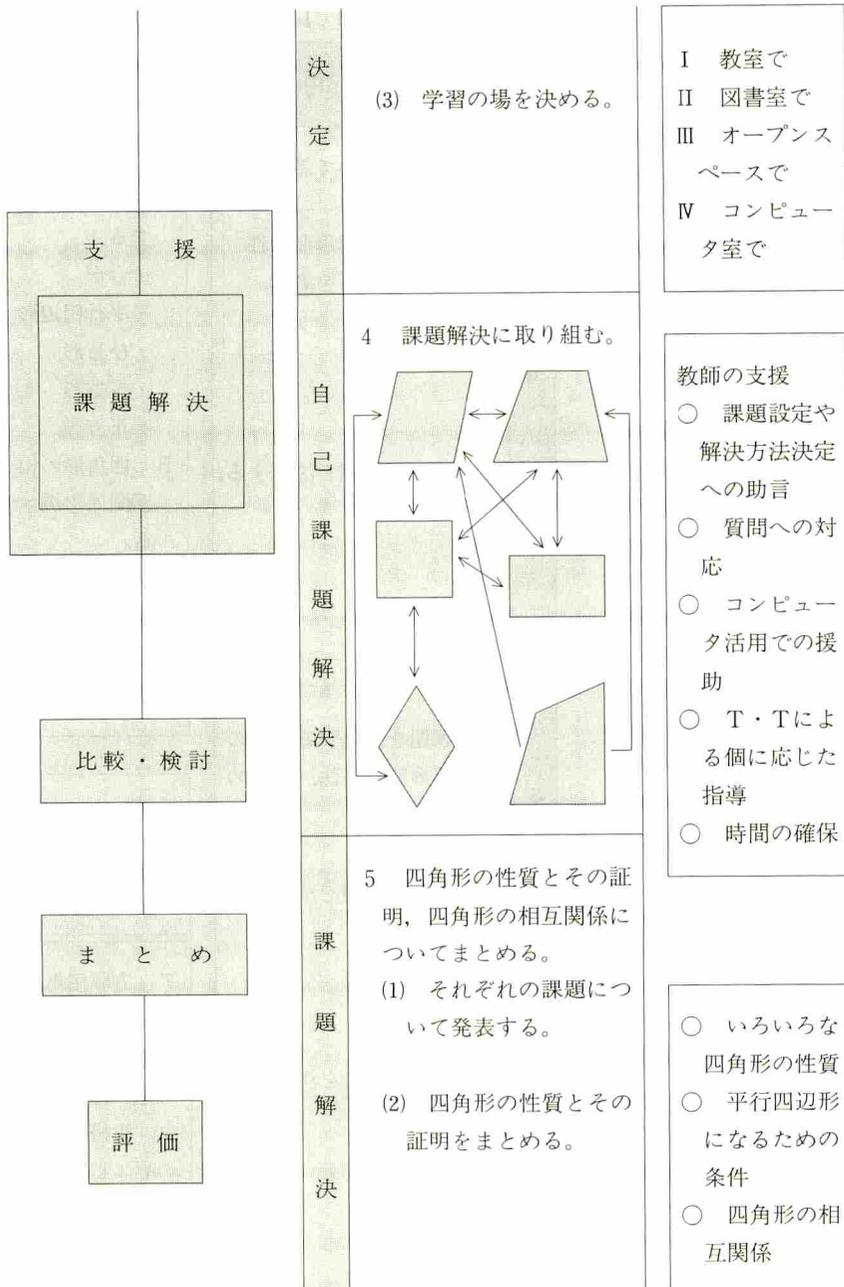
学習活動・内容	
自己課題設定	1 課題について話し合う。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> いろいろな四角形の性質や相互関係を調べ、それを証明しよう。 </div>
	2 自分の課題を決定する。
解決方法の	3 課題を解決するための学習形態、方法、学習の場所を決める。 (1) 学習形態を決める。
	(2) 学習方法を決める。

【複線化への対応】

自己課題の内容
 A いろいろな四角形の性質を調べ、証明する。
 ・台形
 ・平行四辺形
 ・ひし形
 ・長方形
 ・正方形
 B 四角形の相互関係を調べる。
 C 平行四辺形を基準に変形していく条件を考えていく。

① 1人で解決
 ② 2～3人で
 ③ 5～6人で

ア 方眼用紙に図を描いて
 イ 四角形を実際を作って
 ウ 教科書を中心にして
 エ コンピュータを使って



【成果】	
○ 四角形の性質の理解	(3) 四角形の相互関係について、論証しながらまとめる。
○ 学び方の体得	
○ 成就感・達成感の体験	
評価	6 自己評価をし、学習を振り返る。
	○ 平行四辺形を基準としたとらえ方

このような学習の複線化を考慮した授業は、単元全体を通して課題解決を目指していく場合ばかりでなく、課題設定の導入場面や定着・発展を図っていく段階などで、学年や教科に応じて様々に工夫する必要があります。

学習の複線化を図る際のポイント

- ① 一人一人の子どもの実態を把握し、個人差への具体的対応策を考えておく。
(興味・関心、学習の速度、学習スタイル、生活経験、達成度など)
- ② 何を中心にして複線化するのか、ねらいを明確にして授業設計する。
- ③ 学習する場（スペース）や時間を十分に確保する。
- ④ ティーム・ティーチングによる指導も考慮する。

⑦ T・Tの導入で授業を創る

子どもたちは、元来、多様な思いや願い、興味・関心、問題意識を持ち、分りたい、学びたいという気持ちを抱いています。教師がそれらに手厚く応えていけるようにするための、つまり、子ども一人一人がよく分かる授業創りのための指導法の工夫の一つがT・Tなのです。

では、子どもたちの思いや願いに応え、充実感が味わえる授業を創るには、T・Tをどのように導入すればよいのでしょうか。

次に示したのは、中学校2年・数学「関数」のまとめの段階で、生徒の習熟度（到達度）の違いに応じるためにT・Tを導入している実践例です。

特に、①～④（ ）の部分で参考になるのではないのでしょうか。

☞① T1, T2の役割が明確にされています。

T1は数学担当教師が担い、メインとなって進めています。

また、もう一人の数学教師がサブ（T2）となり、「指導」というよりは、「援助・支援」に心掛けています。

☞② 「基礎コース」「定着コース」「発展コース」の3コースが設定され、生徒が自分の課題に応じて主体的に学習に取り組めるよう配慮されています。

☞③ 教師は、「指導者から援助者」という考え方に立ち、一人一人の生徒の学習意欲が喚起・持続するよう心掛けています。

特に、「個々との対話を重視している」ことは、一人一人の生徒を大切にしていることがわかります。

☞④ 「一斉→個別（コース別）→一斉」の形態を取り、全員が同じ学習をしていることの意識付けと差別意識をなくすことに心掛けています。

《習熟度の程度に応じたT・Tの実践例》

☆ 単 元 名 「関数」（本時 11/12・12/12時）

◎ 本時の目標

- A コー ス：表・グラフ・式の3つの表現による見方を深めることができる。
- B・Cコース：既習の学習内容を総合的に使って条件を満たす関数を求めることにより、関数的な見方や考え方を深めることができる。

◎ 本時のT・Tの構想

☞① <機能>	T1・・・当該クラス数学担当教師 主にAコースの生徒の指導・援助に当たる。
	T2・・・TT加配数学教師 主にB・Cコースの生徒の支援に当たる。

<形態> オープンスペースによる110分授業

◎ 展 開

T1の指導・援助	学 習 活 動	時間	T2の援助・支援			
<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時のめあてで、各自の課題を明らかにするための補足をします。 ☞② ○ 各自の課題に応じてヒントを与える。 ○ 援助を受けて解いた後、類題に挑戦し、自力で解決することにより、自信が持てるよう配慮する。 ☞③ ◎ 個々との対話を重視し、意欲とやる気を促すよう配慮する。 ◎ 全体の学習活動に気を配りながら指導援助する。 ○ 個々の観察を通して、評価する。 ◎ 自己評価プリントを配布する。 	<p>1 本時のめあてを確認する。</p> <p style="text-align: center;">「関数」における自己の課題を克服し、さらに能力を伸ばそう。</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 33%;">Aコース 関数の表現について理解を深めよう。</td> <td style="width: 33%;">Bコース 一定の条件を満たす関数（式）を求めることにより、考え方を深めよう。</td> <td style="width: 33%;">Cコース 関数の総合問題を考えることにより、考え方を深めよう。</td> </tr> </table> <p>2 式から対応の特徴を読み取る。</p> <p>3 グラフから対応を読み取る。</p> <p>4 表・式・グラフの表現の違いと関係をつかむ。</p> <p>5 答え合わせをし、自分の考えの正誤を確認する。</p> <p>☞④</p> <p>6 本時のまとめをする。</p>	Aコース 関数の表現について理解を深めよう。	Bコース 一定の条件を満たす関数（式）を求めることにより、考え方を深めよう。	Cコース 関数の総合問題を考えることにより、考え方を深めよう。	<p>5</p> <p>100</p> <p>5</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「自力で解決する」を原則とし、それを援助することに心掛ける。 ◎ 既習の関連問題を想起して考えられるよう支援する。 ◎ 課題解決プリントを提示して解決の糸口とする。 ◎ T1の動きを見ながら、生徒の質問に応じる。 ○ 問題の進み具合を観察しながら、関数的な見方・考え方がどの程度できているか評価する。 ◎ 自己評価プリントの記入の様子から生徒の内面を把握する。
Aコース 関数の表現について理解を深めよう。	Bコース 一定の条件を満たす関数（式）を求めることにより、考え方を深めよう。	Cコース 関数の総合問題を考えることにより、考え方を深めよう。				

この実践例のように、T・Tを導入する場合、複数教師の役割を明確にしておくことはとても大切なことです。そのためには、できるだけ事前の打ち合わせや準備のための時間を設定し、綿密な計画を立てることが必要になってきます。

また、授業中、どのように連携・協力しながら子どもたちに関わっていくべきか、指導と評価をどうすべきか等についても、事前の教材研究の際に考えておかなければならないでしょう。

さらに、このような学習のコースをあらかじめ習熟度に応じて設定し、子どもたちが自らコースを選択して学習に取り組めるようにする場合、子どもたちに「課題選択能力」や「学習の仕方」を十分身に付けておいたり、「学習プリント」を準備しておいたりするなど、子どもたちが主体的に学習を進められるように配慮することが大切になってきます。

ところで、前掲のようなコース別に分けて学習を展開したり、個別指導に当たったりする場合、コンピュータ等を積極的に活用して、自主的、意欲的に学習ができるよう環境を設定してあげることもまた大切なことでしょう。

T・Tの取り入れ方について、文部省の北俊夫教科調査官は次のようにまとめています。

○ 一斉学習の場でのチーム・ティーチング

- ・ T 1 が学級全体を一斉指導し、T 2 が子どもの学習状況を把握しながら個別に指導する。(両者の役割を授業の途中で交代する。)
- ・ T 1 が学級全体を一斉指導し、T 2 が資料の配布、板書、視聴覚機器の操作を行う。
- ・ ゲストティーチャー(地域の人材など)と一緒に、T 1 と T 2 が学級全体やグループの子どもの指導をする。

○ グループ学習や個別学習の場でのチーム・ティーチング

- ・ T 1 と T 2 が複数のグループを分担して指導に当たる。また、学習活動の状況に応じて担当するグループを替える。
- ・ T 1 と T 2 とともにすべてのグループを指導する。
- ・ T 1 と T 2 がそれぞれの対象の子どもを決めて、個別に指導する。

T・Tを実際に経験した子どもたちは、「安心して授業が受けられる」「困ったときいつでも相談できる」など、学習の成立を実感し、充実感を味わっているようです。

そこで、次のポイントに留意してT・Tを積極的に導入し、授業を活性化するとともに、楽しく、分かる、子どもの側に立った授業創りにチャレンジしてみましょう。

《T・Tを導入する際のポイント》

- (1) 子どもの個人差を十分に把握して導入する。
 - ・ 習熟度(到達度)の違い
 - ・ 興味・関心の違い
 - ・ 学習の速度や理解度の違い
 - ・ 学習スタイルの違い
 - ・ 生活経験や環境の違い
- (2) 子どもの、何を、どうしたいのかを明確にして計画を立てる。
- (3) T 1・T 2の役割を明確にして実施する。
- (4) 計画段階だけでなく、必ず実施後に反省し、次に生かすようにする。
- (5) T・Tにはいろいろな型があるので、それぞれの型の特徴を十分に理解して取り組む。
- (6) あくまでも子どもが主体となるT・Tの授業になるよう十分配慮する。

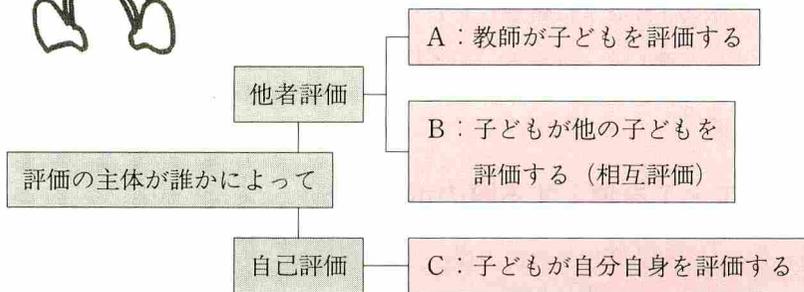
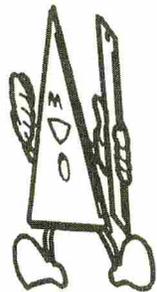


⑧ 子どもの自己評価を生かして授業を創る

学校では様々な評価が日常的に行われています。

指導と評価の一体化ということを考えると、子どもたちは学校生活のどの場面でも指導を受け、同時に評価されたり、時に自分自身を評価していることとなります。

次の図は、主体が誰であるかによって評価を類別したものです。



「A：教師が子どもを評価する」ことは、子ども一人一人に確かなめあてや学習の方法をつかませたり、学習意欲を喚起したりするために必要な評価方法です。また、同じ「他者評価」でも「B：子どもが他の子どもを評価する」という、いわゆる相互評価も、学級集団で協力しながら学習を進めていくために必要なことであり、特に、友だちの学習を評価するという評価能力を培うことができるというすぐれた面を持っています。

このような、いわゆる他者評価に加えて「自己評価」の必要性が叫ばれるようになったのは、なぜでしょうか。

それは、「自ら考え正しく判断できる子ども」の育成という今日的な教育課題と深いつながりがあるからです。

学習を振り返る

右の用紙は、1時間の学習が終わるときに、子どもたちが自分の学習を振り返るために使います。

小学校3年、4年、あるいは高学年でも使えると思います。

(用紙の大きさは、B5横置きにし、2枚取れるようにしました。)

なお、この自己評価用紙は、次の点に配慮して作りました。

- ① 国語、社会、算数、理科で共通に使えるようにした。
- ② 子どもたちの「書く」負担を軽くするため、できるだけ簡単にした。
- ③ レーダーチャートでバランスが見えるようにした。

※ 理解、思考、発表、意欲など8つの視点を設けています。

こうした学習を振り返るための自己評価の様式は様々で、上に示したような用紙の他、数時間分を記録できるものや単元のまとまりで記録できるものなどがあります。

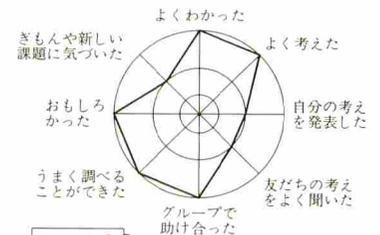
また、1単位時間の終わりだけではなく、授業の途中にも自己評価を取り入れることが大切であることは言うまでもありません。

いずれにしても、子どもたちが自己評価の目的や方法について十分理解をしていることが大事で、そのためにも自己評価の機会は計画的に設定するとともに、根気強く実践を継続し、子どもに自己評価の能力を育てることが必要です。

学習をふりかえって

4年2組 ○○○○ ○○○○

きょうの学習をふりかえって●をつけ、線で結びましょう。



かんそう

消火せんの数かぼくらのグループが一番おおく調べることができた。
6人で協力してできた。
たいいくかんのうらでも見つけてよかった。
先生にはめられた。
あき子さんのグループの消火せんの調べたのはすごいと思った。
めだついろいろだとわかった。

学習に生きる

—学習の途中における自己評価—

それでは、学習の途中における自己評価は、どのように行えばよいのでしょうか。

先に示したようなレーダーチャートの自己評価用紙を用いたり、学習内容と関わりのあるプリントを用意したりして学習途中の自己評価を行うことができますが、学習の流れを考慮した場合、時間や手間がかかるものは避けた方がよいと思います。子どもたちの負担を軽くするという観点から次のような自己評価表を考えてみました。

—数時間にわたって1単位時間に2回自己評価記録ができる用紙—

6年3組	算数	6/16	6/17	6/19	6/20	6/23	6/24
	□ □ □ □						
1	やる気がある	◎ ○ ○ △ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○
2	わかる	○ ◎ △ ○ ○ ◎	○ ◎ △ ○ ○ ◎	○ ◎ △ ○ ○ ◎	○ ◎ △ ○ ○ ◎	○ ◎ △ ○ ○ ◎	○ ◎ △ ○ ○ ◎
3	できる	○ ◎ ○ △ ○ ◎	○ ◎ ○ △ ○ ◎	○ ◎ ○ △ ○ ◎	○ ◎ ○ △ ○ ◎	○ ◎ ○ △ ○ ◎	○ ◎ ○ △ ○ ◎
4	調べる	◎ ○ ○ ○ ○ ◎	◎ ○ ○ ○ ○ ◎	◎ ○ ○ ○ ○ ◎	◎ ○ ○ ○ ○ ◎	◎ ○ ○ ○ ○ ◎	◎ ○ ○ ○ ○ ◎
5	考える	○ ○ ○ △ ○ ○	○ ○ ○ △ ○ ○	○ ○ ○ △ ○ ○	○ ○ ○ △ ○ ○	○ ○ ○ △ ○ ○	○ ○ ○ △ ○ ○
6	発表する	△ △ △ △ △ △	△ △ △ △ △ △	△ △ △ △ △ △	△ △ △ △ △ △	△ △ △ △ △ △	△ △ △ △ △ △

この自己評価表では、1単位時間の途中と終末に自己評価の機会が持てるようになっています。たとえば、◎は「とても」、○は「まあまあ」、△は「あまり」という記号による自己評価で、空欄は教師が「1、2、3だけ」と評価項目を限定したり、自己評価の機会を作らなかったりした場合です。

子ども自らが学習途中の自己を見つめるということにも意義はありますが、子どもの机上のカルテとして、個別指導のために活用することが大切です。

自分で評価することのよさや方法がわかる（理解）、○を付けたり書いたりできる（技能）、進んで振り返る（情意）という評価能力も培われます。

—まとめの自己評価—

1単位時間を振り返る自己評価用紙については、先に示しましたが、その自己評価が学習に生き、子ども一人一人が「自己評価は楽しい」「自己評価は自分の学習に役に立つ」ということを感得しなければ、それはいずれ形式だけの、ただやればよいという評価になってしまいます。

- ① 本時の学習の前に、前時の自己評価を振り返り、努力する項目に○をつける。
- ② 単元数時間の自己評価をまとめて、自分の単元学習全体を振り返る資料とする。

左は、1単位時間の学習を振り返る自己評価の「生かし方」の例です。①は、学習に臨む子どもの構えを確かめることができ、②は、子ども自らが単元の学習を振り返り、次の学習のめあてを持つために有効です。

下に示したのは、小単元9時間分の自己評価の素点を加えて1枚の用紙に表したものです。（小学校5年・社会）

「学習を振り返る」自己評価のレーダーチャートは、内側の円から1点、2点、3点という配点をしますが、単元の学習を振り返る時は、素点に自己評価回数を乗じて、たとえば内側から9点、18点、27点というように尺度を変えて使うことができます。

次は、自己評価の実際です。

学習をふりかえって

5年1組 ○○○ ○○○○

きょうの学習をふりかえって●をつけ、線で結びましょう。

よくわかった

よく考えた

自分の考えを発表した

友だちの考えをよく聞いた

グループで助け合った

感想

米づくりのさかんな庄内平野の学習ではあまり発表できなかった。うまく調べることができたこともあったけれども、発表のときにせつ明ができない。手を上げようと思ったときにドキドキしていたら、発表されてしまった。かんばって発表したい。



では、「自己評価を生かした授業」を創ろうとするとき、単元の指導計画には「自己評価」をどのように位置付ければよいのでしょうか。

小学校4年・国語「雪のあるくらし」の教材の場合で考えてみましょう。

「自己評価」を単元の指導計画に位置付けた例

- 音読の自己評価を毎時間の始めに行う。
- 学習を振り返る自己評価を毎時間の最後に行う。

時	学習活動・内容	自己評価のねらい・方法・内容
第1次	1 ○ 題名から内容を予想する。(題名読み) ○ 一読後の感想を書く。	□ 題名読み、一読後の感想から教材文に関心を持っているか。(質問紙プリント、多肢選択)
	2 ○ 学習の見通しを持ち課題づくりをする。 ○ 新出漢字や語句を調べ練習する。	□ 新出漢字と語句の問題への取り組み後、解答を見て、自分で採点し、自己評価後、さらに新しい問題に取り組む。(自己採点、自己補充)
第2次	3 ○ 根雪の説明、根雪が見られる地方などを読み取る。	※ 特に自己評価の計画はない。
	4 ○ 雪おこしや雪囲いなどの言葉を手がかりにして、冬を迎える様子を読み取る。	□ ③～④までのキーワードを右ページに事例で見つけられるかを評価する。 □ 毎時の自己評価の結果を支援に生かす。

この計画では毎時間の導入時の「音読」と終末時の「学習の振り返り」に自己評価が位置付けられ、授業中の「自己評価」は、1時間にせいぜい1回、特に自己評価の計画のない時間もあります。

自己評価が、子どもたちの負担にならないように配慮することも大事です。

さて、それでは、こうした自己評価の結果は、子どもたちの学習の支援にどう生かせばよいのでしょうか。右ページの事例に「音読の自己評価」が位置付けられていますが、これは子どもたちが音読のめあての把握や意欲を高めることにもつながりますし、時には、友だちに音読を聞いてもらって評価してもらうこともできます。また、「ワークシートによる自己評価」を学習コース選択に生かすのも有効だと思います。

「自己評価」の結果を支援に生かした例

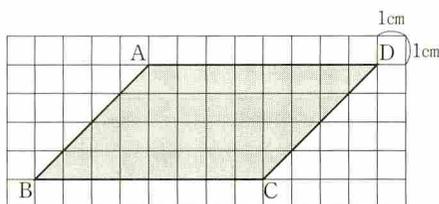
学習活動・内容	自己評価のねらい・方法・内容
1 前時の学習内容を振り返り、本時の学習のめあてをつかむ。	□ 音読の自己評価 1/12 1/13 1/14 1/19 1/20 1/21 1/22 1/23 △ ○ ◎ ◎
2 ①～⑨段落を読む(音読)	
3 ③～⑨段落のキーワードを見つける。	□ ワークシートによる自己評価 ◎ 前時の学習の、キーワードの見つけ方を復習してから取り組むようにする。 ◎ ワークシートに③～④のキーワードを書き込む。 ◎ キーワードの解答(OHP)を見て自己評価し、結果から、自力解決班と教師支援班に分かれる。
4 「雪おこし(おろし)」について読み取る。 ① 「雪おこし」とは何かをノートにまとめる。 ② 「雪おこし」を聞く人々の気持ちを発表する。	◎ ③～④段落からキーワードを見つけましょう。 ◎ ⑤～⑨が自分でできそうな人は、プリントで、⑤～⑨に取り組んでみましょう。 ◎ キーワードを見つけることが難しかった人は、先生といっしょ
5 「雪囲い」について読み取る。 ① 「雪囲い」とは何かをノートにまとめる。 ② かんじょうな雪囲いを作る人々の苦勞について話し合う。	◎ 机間指導により、Sさんが「雪おこし」についての記述を見つけれられているか確かめる。 ◎ 「雪おこし」とは何かをSさんのことばでノートに書くよう助言し、書いた文章に自信を持てるようにする。 ◎ 耳元で発表の練習をするように促す。 ◎ 挙手を確かめて指名する。
6 本時の学習内容と学習の仕方について振り返り、「雪国の冬の生活は、こうして始まる」の「こうして」の意味を考えながらノートにまとめる。	◎ 「雪囲い」については「雪おこし」のときと同じように、自分のことばでノートに書くように励ます。 ◎ 発表の意欲があるかどうか観察し、不安を取り除くようにことばかけをする。
7 次時の学習の見通しを持つ。	◎ 自己評価表への記入を観察し、発表についての評価を確かめる。 ◎ 発表の内容をしっかりとって発表ができたことを自己評価表に添え書きし、ほめる。

「学習を振り返る」自己評価表の観察により、Sさんが発表に自信がないことを把握した教師が、発表の内容が持てるようにし、発表の仕方を練習させ、励ます支援をしました。Sさんは、本時のまとめの自己評価表に「発表ができてよかった。」という感想を書いています。教師は、その自己評価表に「Sさん、内容がしっかりした発表だったよ。2回も発表できた。よかったね。」と添え書きしました。支援に生かされてこそその自己評価だと思います。

⑨ 個に応じた支援ができる授業を創る

小学校5年・算数「四角形と三角形の面積」の授業で、「平行四辺形の面積はどうすれば求められるだろう。」という課題を提示しました。『 $AB \times BC$ で求めます。』という

発表をした子どもに、あなたはどんな言葉かけ（支援）をしますか。



このような子ども、教師の支援一つでやる気が起きるでしょう。万一「おかしいね。それは長方形の面積の求め方だね。」などと言葉かけをしまうと、その子の学習意欲は一気に消沈して、学習に興味を示さなくなるでしょうし、自分の間違いに気付かず授業が進んでしまうことになってしまうのではないのでしょうか。また、そのようなことが、その子を算数嫌いにしてしまうことにもなりかねません。

教師が子どもを指名した以上は丁寧に取り上げ、たとえ間違っただとしても、それに気づき、その子が納得するよう温かく支援する姿勢が「一人一人を大切に授業」につながるのです。

支援とは、「子どものもつ可能性（学習活動を通して表れるその子らしい感じ方、考え方、判断の仕方、行動の仕方などの潜在的な資質や能力）に向けて、子どもが動き出せるように援助してやること」ととらえると、私たち教師は、一人一人の子どものよさや可能性を認め、意欲的に学習できるようにしてあげることが大切です。

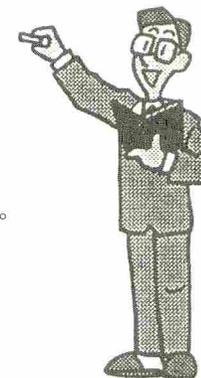
限られた時間や学級の子どもの人数を考えると「個に応じる」ことに

限界がないわけではありません。

しかし、1単位時間に全ての子どもを具体的に支援するという考え方ではなく、数時間、あるいは単元という時間の中でより多くの「個」に具体的な支援をしていこうとする考え方に立てば、難しいことはありません。この時間には、AさんB君など数名にだけでも具体的な支援をしたいという考えで進めていけばいいと思います。

では、子どもの個々の能力や学習意欲、学習スタイル、学習速度など様々な「個」が表れる自力解決の段階での『個に応じた支援』について、どのように支援しながら授業を創っていけばよいか考えてみましょう。

この段階では、子どもが課題に対してそれぞれの解決の仕方を工夫することを通して、子どものよさが十分発揮できるような支援が大切でしょう。



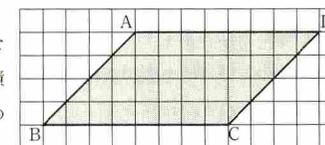
〔小学校5年・算数「四角形と三角形の面積」第1時目の実践例〕

◎ねらい

- ・自分の考え方に基づいて、根気強く取り組む。
- ・自分の考えを筋道立てて表現できる。
- ・等積変形による面積の求め方を理解する。

【課題】

右の図のような平行四辺形の面積はどうすれば求められるだろう。



このような課題が設定されると、解決の見通しとしては、次のようなパターンが予想されるのではないかと思います。それぞれについて、どのような支援をしながら「分かる授業」「学びがいのある授業」を創っていくか、「個」に応じた支援を考えてみましょう。

個 に 応 じ
《 自 力 》

見通し 見通しが立たない子

①方眼の数を数える子
②1cm²の正方形に変形する子

ミニ授業
色板を準備し、方眼紙の上に並べて確かめられるようにします。
・方眼の個数を数えて、測れないか
・半端な方眼の部分を切り合わせたり移動したりして長方形にできないか

自力解決への励まし

机間指導（一人一人の解）

戸惑っている子へ
ヒントカード（方眼を利用したもの、補助線を引いたもの等）により解決の糸口を与え進めるようにします。
[つまずき]

一応の解決ができた子へ
解決策を振り返り、正しいことの確認とともに、自分の考えを自分なりの言葉で説明できるよう援助します。
[振り返り、発表]

励まし

①や②の子には、ヒントカードを教師が示します。
①②の子はともに、方眼の目を数えて解こうとしています。そこで、自分の知っている図形に変形することを通して、平行四辺形の面積の求め方に気付けるように援助します。ここでは、4種類の三角形を準備し、その一つだけを教師が移動し、それをヒントにして考えられるようにします。
②の子には、移動して変形したことのよさを認めた上で、どんどん続けるよう励まします。

発表

○意図的な指名から、よりよいものへと練り上げていくこととなりますが、まずここで大切なのは、子どもたちの発表を大事に扱うことです。発表の中からよりよいものだけを選別して取り上げることをないようにしましょう。
○発表の順番としては、とてもよくできた子よりもつまずきながら進んだ子の発表が先のほうがよいでしょう。
○発表された考え方や方法がたとえ間違っていたとしても、その子の追究を主体として、教師や友達が援助しながら、現在身に付けている知識を足がかりに思考を発展し、より納得のいくものへとつなげていくことが、その子にとっての支援となり「個に応じる」ということになります。

た 支 援

解決の例

③外側の三角形を移動し、長方形に作りかえる子
④三角形を平行移動し、長方形に作りかえる子

(既習の長方形や正方形に変形することができないか?)

決の様子を把握）☆座席表などへの記録

正しいが自信を持ってない子へ
正しいことを認めた上で、長方形に等積変形する際、どこを切ったかが分かるようにメモしたり、色分けをしたりすること、いくつかの切り方を考察するなどの方向を示します。[情報]

進んでいる子へ
友だちに考え方や方法をアドバイスする教師役を勧めます。
○一つの方法だけでなく多様な方法の求積への取り組みを勧めます。

③や④の子は、友だちと相互援助学習をします。
自分の考え方を説明することを通して、③は④の考えのよさに気付くように、また、友だち同士で考え、互いに助け合いながら、様々な考え方を発見することができるようにします。
〈話し合いの中から〉
③の子「2回外側の三角形を移動すると長方形になるよ」
④の子「大きい三角形にする」と1回でできるよ」
③の子「なるほど」
④の子「もっと違う方法はないかな」

友だちの考えや意見を受け入れたり、友達に協力、手助けしたりすることも支援となりますので、学級の雰囲気づくりは大切です。

学習プリントで主体的に発展学習をします。
例えば次のような問題です。

学習が進んでいる子どもは、
◇別の考え方はないか考える
◇似た問題を作る ◇類題を解く
◇教師役をする ◇難問に挑戦する

子どもたちが自分の考えをうまく表現しまとめることができるようになるには、日ごろから、子ども一人一人の考え方を大切に、それらを丁寧に取り上げ、問題解決に生かしていくという支援の積み重ねが生きてきます。「個」に応じた、子どもの可能性が伸びる支援を心掛けて授業を創ってみましょう。

⑩ 個人カルテの活用で授業を創る

信州大学の清水毅司郎先生は、「カルテ」について次のように述べています。「教師が一人一人の子どもへの印象に『おや!?!』と意外なズレを感じたとき、そのことを簡潔に記しておくメモのことである。そして、期間をおいて再びその子に意外なズレを感じたとき、以前のメモと結び付けて、あれこれ解釈を試み、その子どもへの把握を動的・立体的にしていくためのものである。」(1993.「授業研究8月号」明治図書より)

また、東京大学大学院の藤川大祐先生は、同じ図書の中で、「カルテ」は、「教師が自分の予測とくい違ったものを発見したとき、すなわち『おやっ!?!』と思ったとき、それを簡潔に記すべきである」と述べています。

「個人カルテ」には、特に決まった形式はありません。「個票」のようなものもあれば、「座席票」のようなものもあります。単なる白紙にメモのように記録してもよいし、学級の名簿を活用してもよいでしょう。

それぞれの教師が、自分にとって使いやすい「カルテ」を工夫し、活用することが大切ではないでしょうか。

いつ、どんなことを記入するか

- (いつ)「おや!?!」と思ったとき
 - (どんなことを) 事実を
 - (どのように) 簡潔に
- すぐに・その日のうちに

どのように考察するか

- 事実と事実をつなげる ⇨ 解釈 ⇨ 諸事実の背景にある子どもの個人的な姿を把握する。(考え方、行動の仕方、生き方など)

カルテ記入上の留意点

- じろじろと子どもの不手際や弱点を見つけようとしなない。
- プラス面の事象(事実)を中心に書く。
- 事実をありのままに書く。
- 簡潔に書く。
- 事実に気付いたときすぐに(できるだけ時間中に)書く。

それでは、具体的なカルテ活用の実践例を見てみましょう。

〈実践例1〉～音楽科の授業で活用した「個人カルテ」～

次に掲げる「個人カルテ」は、子どもの個性や能力(学力)を、幾つかの観点に分けて、事実(変化)が現れたときに記録し、それを授業で活用したものです。あらかじめ、学年当初に、子どもの個性や能力をできるだけ把握して記録しておきます。

そして、4月からの授業においてその事実と異なるようなズレを感じたときに簡潔にメモを取り、次回からの授業に活用(意図的に指名したり、発表の機会を与えたり)します。

1 か月から 2 か月後にその変化について考察し、指導の反省をするとも
 にその子への対応の在り方等について考えることが大切です。

個人カルテ		年 組 No. (氏名) A, S			
一般的な 発達特性	興味・関心 意欲・態度	感 じ 方 好 み	技 能 知識理解	友人関係	そ の 他
○ 体が大きく、運動神経が発達している。 ○ 髪が、天然パーマであることを本人は気にしている。	○ 歌唱よりも楽器演奏に興味がある ○ 学習態度は全般的にまじめ ○ 意欲的に学習に取り組み、リーダー的存在	○ リズミカルな曲だと一段と表情が豊かになる ○ 範唱や範奏を聴いて、細部まで感じ取れる	○ リコーダーの演奏が得意 サミングにやや抵抗がある ○ 諸記号の理解がよい	○ M男とよくトラブルを起こす それ以外は男女の別なく仲がよい	○ 家庭の理解や協力もあり、よく練習してくる。 ○ 合奏部でトランペットを受け持ち、真面目に練習している
	5/9 いつものような元気がなく、学習態度が消極の一肩をたいたいて励ます		5/9 好きなはずのリコーダーの演奏が冴えない—放課後聴くことを約束		

この実践例を見ると、次のようなことがわかります。

- ① 音楽の学習を展開する際に必要な観点が、細かく分けられ、日々の授業に活用し易くなっています。
- ② 日々の授業で気付いたことや実際にあった事実を、観点別に書き込めるようになっていきます。
- ③ どの題材で、どんな学力を、どこまで、どう育て、高めたいか、また、どの観点がどこまで高まっているかが把握しやすくなっています。
- ④ 指導や評価に大いに活用できるようになっています。

〈実践例 2〉～座席表を活用した「個人カルテ」の例～

授業に入る前に、どの段階の、どの場面で、どの子に、どんな活躍の場を与え、何を伸ばし、育てたいかを前もって計画しておき、実際場面での子どもの活動ぶりを観察したり、助言したりして座席表に様子を記録（メモ）していきます。

Y 子	・教師の演示実験に積極的に質問	導入
		展開
	・「～はどうしてだろう？」と疑問を抱く	終末

この実践例は、座席表をあらかじめ左のように「導入」「展開」「終末」の3段階に分けておくのが特徴です。

実際に「課題把握の段階」で気付いたことや、「まとめの段階」で、普段と変わったことがあれば、すぐにそれを記録できるようにしてあります。

(月 日)

教 卓

〈学習課題・本時の目標〉
 ○ 溶け残った砂糖を溶かすことはできないだろうか。

《カルテの作成と活用のポイント》

- ① 子どもの新しい面を発見したら、忘れないうちに、簡潔に書くこと。
- ② あまり多くを書かず、記号や単語で簡単に書き、一目でイメージがわくようにすること。
- ③ ㊦扱いにすること。(あくまでも指導に役立てることが目的)
- ④ 子どもの前で悪い点を記入しているという印象を絶対に与えないこと。
- ⑤ 教科・道徳・特活・生活一般などに分けて作成しておくことと便利であること。

⑪ S-P表の活用で授業を創る

中学校1年・数学「1次方程式の解き方」の学習後に、その計算技能の理解の実態を調べるために確認テストを10問行いました。

その結果、A男（3番）とB子（9番）は正答数が「6」で同じでした。あなたは、この結果をどう診断しますか。

この場合のような学習診断では、個人をみる（一人一人の子どもの正誤答を把握すること、全体からみる（一人一人の子どもの正誤答を、クラス全体の達成、未達成の内容と傾向を照らしてみる）ことが大切です。

そこで、テストの結果を点数のみの処理に終わらずに、（表1）のように、問題ごとの正誤答を○や×で一覧表に表すと、個人や全体の傾向などが把握しやすくなります。

しかし、この表のままだと2人の生徒の間違った問題は、他の生徒と比べてどうか診断しにくく、また一人一人の生徒を生かすための支援の在り方や教師自身が指導を反省する資料とするには不十分と言えます。

そこで、（表1）を正答数の多い順に生徒を縦に並べ（S）、問題番号を左から正答数の多い順に横に並べ替えます（P）。そうすると、表の左上に○印（正答）が、右下に×印（誤答）が多く集まることになります。こうすることで、全体的な傾向からみた生徒の正誤答の状況や問題の傾向が把握

（表1）

		問題番号										正答数
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	
生徒番号	1	○	○	○	×	○	×	×	○	×	・	5
	2	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	8
	A男 3	○	×	○	○	×	○	○	×	○	×	6
	4	○	○	×	×	×	○	×	×	・	・	4
	5	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×	3
	6	○	×	○	×	○	○	×	○	・	×	5
	7	○	○	○	×	×	○	○	×	×	○	6
	8	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	9
	B子 9	○	○	○	○	○	○	・	・	・	・	6
	10	○	○	○	×	○	×	○	○	・	・	7
正答者数		10	8	7	3	8	5	6	5	4	3	

○→正答 ×→誤答 ・→無答

問題番号

きます。これが『S-P表』（表2）です。

正答数が同じ場合、正答がより左に集まっている生徒を上位に並び、問題番号は正答が上に集まっているものを左から並べます。

また、一人一人の生徒の正答数の

（表2）

		問題番号										正答数	正答率
		①	②	⑤	③	⑦	⑧	⑥	⑨	⑩	④		
生徒番号	S												
	P												
	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	9	90
	2	○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	8	80
	10	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	7	70
	B子 9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	6	60
	7	○	○	×	○	○	×	○	×	○	×	6	60
	A男 3	○	×	×	○	×	×	○	○	×	○	6	60
	1	○	○	○	○	×	○	×	×	×	×	5	50
	6	○	×	○	○	×	○	○	○	×	×	5	50
4	○	○	○	×	○	×	×	×	・	×	4	40	
5	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	3	30	
正答者数		10	8	8	7	6	5	5	4	3	3		
正答率		100	80	80	70	60	50	50	40	30	30	平均正答率=59%	

ところに区切りを入れ、それを表のように結びます。【S曲線】（例えば、8番の子は正答数が9なので左から9つ目のところ）また、同じように問題番号ごとに、正答数のところに表の上から区切りを入れ結びます。【P曲線】（例えば、7番の問題は正答数が6なので上から6つ目のところ）

〈S-P表からは、次のようなことが学習診断できます〉

○個人をみると

A男は、比較的にみんなができていた問2や問5を間違っていて、他の子どもに比べS曲線よりも左に間違いの問題が多く、正誤答のパターンが違うので理解不足よりも、ミスの可能性が大きいと考えられます。理解不足としても、個別指導をすることですぐ解消できるでしょう。特に問4は正答していますが、正答のパターンから真に理解しているかどうか確かではないので、似たような問題を与えて確かめることが必要でしょう。

B子は、問1～6まで正解であり、特に上位の子も間違っている問4ができていたことから学力的には問題がなく、問7～10が無答なのは、時間が不足であったと考えられます。



○全体の傾向をみると

問1, 2, 5など左に位置する問題は、正答率が高く学習内容が定着しており、逆に、問4や問10のように右側に位置する問題は、正答率が低く理解度が低いか指導が不十分であったかが一目で分かり、今後の指導の中で注意すべき点であると考えられます。特に問4は上位に位置する生徒も間違っていることから、指導の反省をする必要があると言えるでしょう。

S曲線の左側にある誤答は不注意や勘違い、単純な理解不足である場合が多いので、授業中の机間指導等で支援すれば、ミスに気が付き、自分でも注意するようになると思われます。

○教師の反省材料として

S曲線より右下の誤答は、基本的に理解できていない場合が多いので、指導法を反省するとともに、指導計画の吟味が必要となるでしょう。

問題全体の平均正答率は59%です。達成度が高いか低いかは、教師がどの程度のレベルを意図したかで決まります。そして、授業の何が原因でそのような結果になったのか、子どもの側と教師の側に分けて反省し、どのようにフォローすべきか考察するとともに、次時からの授業創りに生かすことが大切です。

S-P表を『補充・深化学習』の授業創りに生かした例

S-P表の結果から、クラス全体としての定着度が低い問題があること、個人の定着度に差があることが分かりました。

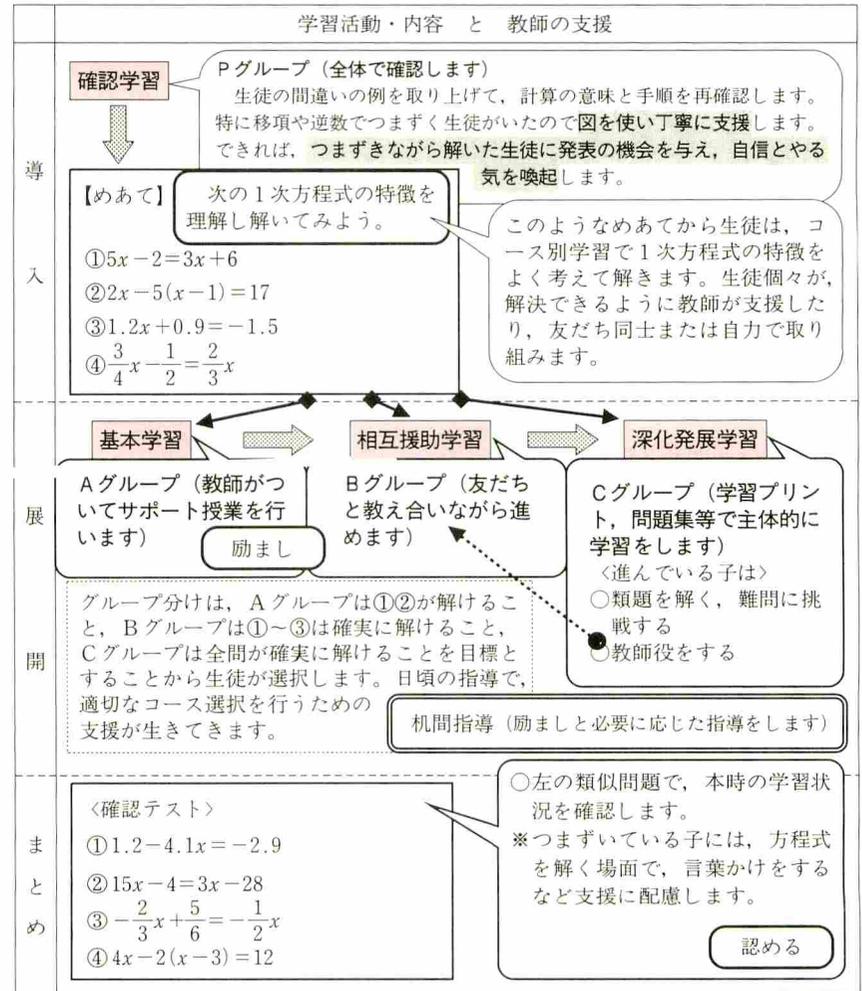
(表3)のように大きく4つのグループに分け、初めに全体で確認学習(Pグループ)をし、その後にA・B・Cグループで、生徒が自己課題を持って学習ができるように計画し、そこで、このS-P表

(表3)

		問題番号										正答数	正答率		
		S	P	①	②	⑤	③	⑦	⑧	⑥	⑨	⑩	④		
生徒番号	Cグループ	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9	90
		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8	80
		10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	7	70
	Bグループ	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6	60
		7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6	60
	Aグループ	3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5	50
		1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5	50
		6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5	50
		4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4	40
		5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3	30
正答者数		10	8	8	7	6	5	5	5	4	3	3			
正答率		100	80	80	70	60	50	50	50	40	30	30		平均正答率=59%	

を「1次方程式の解き方」のまとめの段階で生かしてみました。

○ねらい 自信を持って1次方程式が解けるようになる。



同じように学習していても、生徒たちのつまずきや学習内容の定着度は違ってきます。S-P表の活用で、それらの違いを把握しやすくなるとともに、自分の授業を反省し、「個」に応じた授業を展開する授業創りに生かすことができます。ぜひS-P表を用いた授業創りに取り組んでみましょう。

⑫ コンピュータの活用で授業を創る

中学校2年・数学の「相関」の授業で、教科書の例題をもとに相関図を書いています。

×軸、Y軸の目盛りの取り方や点の打ち方などについていねいな指示を受けたにもかかわらず、生徒の作業は遅々として進みません。



「この調子だと、1時間で完成できる相関図は2個か3個が限度のようだ。負の相関を示すもの、相関のないものも書かせてみたいし、生徒に相関関係のありそうなものを見つけさせ、分析したことの発表会もやってみたいし…、時間的に難しいかな…?」

教師は、待ちきれずに作業を中断させ、用意した相関図を提示してしまいました。

生徒の活発な学習活動を望んでいた教師の考え通りには授業は進みませんでした。

このように、作業を伴う統計の学習ではデータの処理に予想以上の時間がかかってしまうことから、教師が予定していた内容を十分に学習することが難しく、統計学習本来の目的である「集団の性質を数量的に表す資料から、集団全体としての特徴を調べる」ことが達成されずに終わってしまうことがあります。

このような作業を伴う学習では、コンピュータの活用を図ると時間的なゆとりが持てるばかりでなく、期待以上の学習効果をあげることができます。

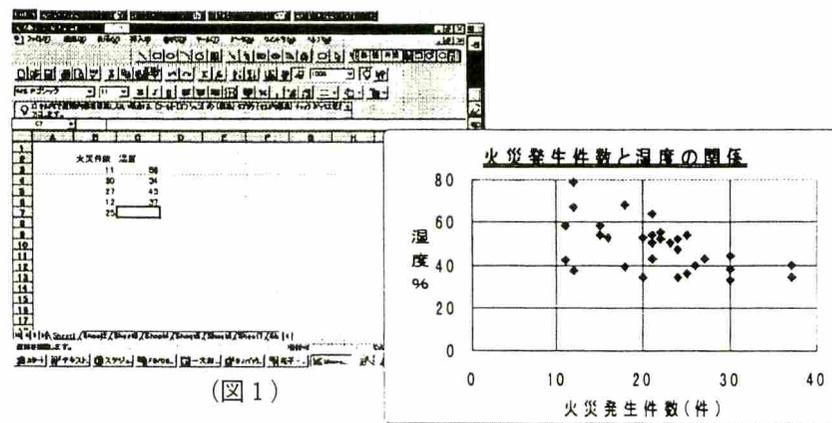
右の表は、火災発生件数と平均湿度を表したものです。この表を用いて相関図を書くとなると、全員が書き終えるまでには相当な時間がかかると考えられますが、表計算ソフトを活用すると、その時間不足の心配は解消されます。

火災発生件数(件)と平均湿度(%)

件数	湿度	件数	湿度	件数	湿度
1	1	2	1	3	0
2	0	1	6	5	3
2	7	4	3	2	5
1	2	3	7	1	5
2	5	4	3	7	4
2	2	5	2	3	5
2	2	5	5	1	8
2	0	5	3	1	2
2	1	6	4	1	8
2	1	5	4	3	3
1	2	6	7	2	1
1	1	4	2	2	4
3	0	3	8	3	7
1	5	5	4	2	4

たとえばExcelを開くと、画面に下のようワークシートが表示されます。

(図1)



(図1)

(図2)

そのセルの中にデータを入力し、グラフを選択するだけで、図2のような相関図を表示してくれます。

操作に慣れていない生徒でも10分もあれば十分に作成可能であり、データさえそろっていれば、1単位時間にいくつもの相関図を完成することができます。

相関図が簡単に書けることを知った生徒は、驚きとうれしさ、楽しさから、この方法で「睡眠時間と身長の関係」とか「ご飯の量と体重の関係」などの、

自分で調べてみたいことの発想を次々と広げ、意欲的に取り組もうとするに違いありません。

コンピュータの積極的な活用は、子どもの願いを叶えるとともに、子どもの学習意欲の持続、さらには、興味・関心の醸成にも結び付きます。

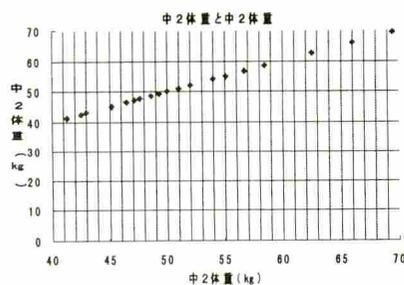
表計算ソフト Excel を用いると次のような効果が期待できます。

① 表計算ソフトを用いることにより、分析結果を検討するゆとりが生まれる。

コンピュータを活用することによって手作業の煩雑さがなくなり、結果をじっくりと分析して傾向を読みとるゆとりが生まれてきます。こうした“ゆとり”は他のことについても発展して調べようとする意欲にもつながり、学習内容に対する興味・関心も高まります。また、コンピュータの持つ“よさ”への気付きも期待できます。

② 容易に試行できることが深い理解につながる

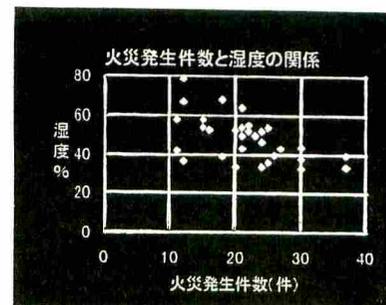
「中2の体重と中2の体重」といった、同じデータで相関図をつくって調べてみようとする生徒も予想できます。データは当然のことながら1直線に並ぶ(図3)こととなりますが、このことは相関図の意味をとらえ直すのにも有効であり、認識が深まるに違いありません。



(図3)

もし、時間的に可能であれば、調べた結果をプレゼンテーションソフトを用いて表現する活動にも発展することができます。

プレゼンテーション用のソフトは、画像や表計算で作成した表やグラフを



容易に貼り付けることができるとともに、音声やアニメーション効果などを入れることができ、生徒の創作意欲をかき立てます。

自らの法則発見に加えて、その結果を効果的に表現しようとするこの活動は、様々なことを調べてみようとする

生徒の拡散的な思考を促し、学習意欲の持続につながっていきます。

【コンピュータの活用で授業を創る場合のポイント】

- 1 コンピュータを取り入れることによって、どのようなことが可能になるのか、事前にソフトを開いて内容を確認しておくこと。
- 2 どのようなねらいでコンピュータを活用するのかを明確にすること。
 - ・意欲を喚起するために活用する。
 - ・思考のためのツールとして活用する。
 - ・表現や伝達の道具として活用する。
- 3 コンピュータを使う楽しさだけでなく、コンピュータで表現する楽しさが味わえる方向で活用するように心がけること。
- 4 コンピュータの「簡単、きれい、速い」という「よさ」を踏まえて、一人一人の子どもの学習への願いに応えられる使い方を考えておくこと。
- 5 あくまでも子ども主体に考えること。

(注) 本稿で用いたExcel及びプレゼンテーションソフトのPowerPointは、Windows95上で動作させたものです。(Excel, PowerPoint, Windows95は、米国マイクロソフト社の登録商標です。)

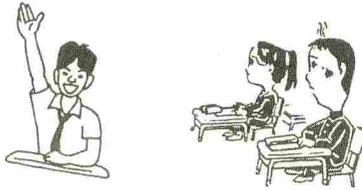
⑬ 学習形態の工夫で授業を創る

「先生！できました。」

「先生！ぼくもできました。」

「先生！わかりません。」

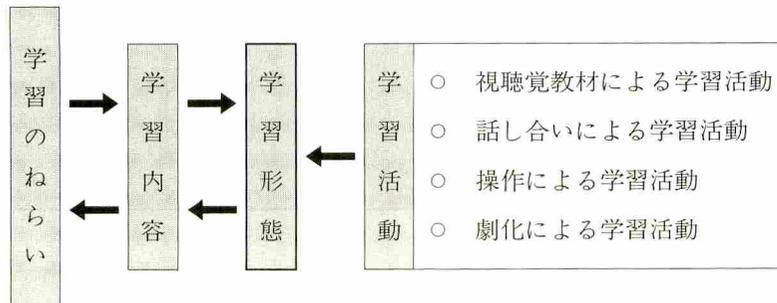
「先生！どうやればいいんですか。」



授業中、子どもからこんな言葉がでたとき、あなたならどうしますか。できた子どもに別の問題を与えたり、分からない子どもたちを集めて指導したりしませんか。それが、学習形態の工夫なのです。

「分かる授業」「やる気の起こる授業」を創るには、一人一人の子どもが生かされ、意欲的に学習に取り組むような効果的な学習指導法の改善が大切です。その一つに「学習形態の工夫」があります。これをより効果的にするためには、次のような手順で学習形態を考えていく必要があります。（資料1）

【資料1】《学習形態を考える手順》



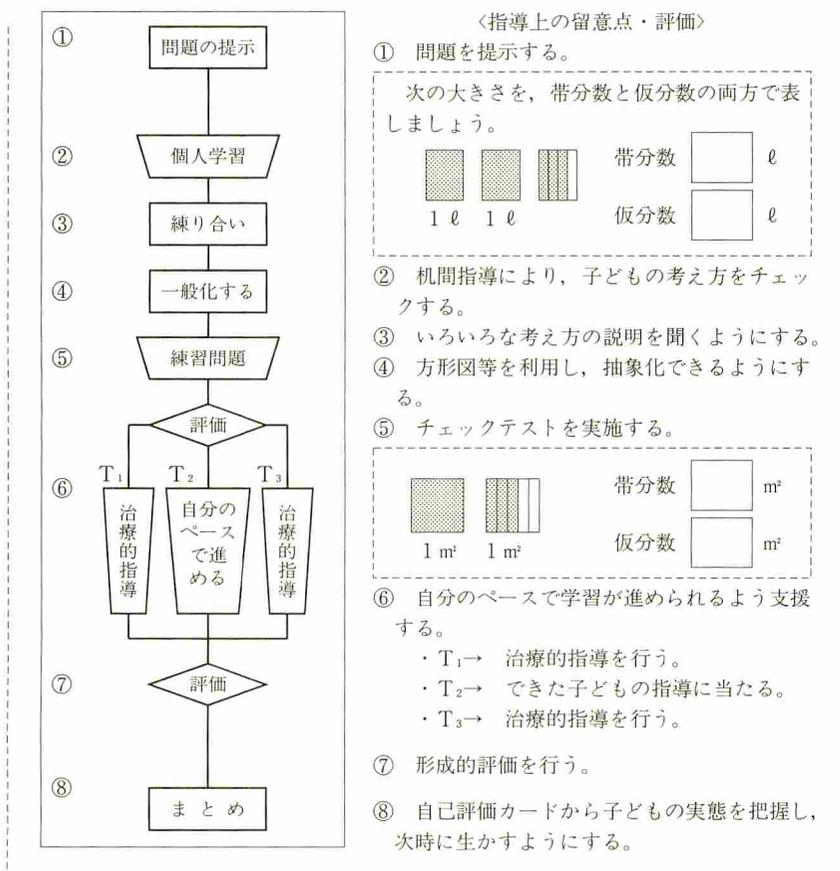
学習形態には、一般的に人的構成面から「一斉学習」「個別学習」「グループ学習」の3つの形態があります。どの形態をどこで生かしたらよいか、3つの形態をどのように組み合わせて学習活動を構成するかは、授業設計の段階でとても重要なことです。

そこで大切になってくることは、一人一人の子どもの実態を把握した上で、綿密な教材研究を行い、一単位時間のねらいをより具体的なものにすることです。そうすることによって、学習の内容が精選でき、どんな方法で学習活動を構成するか（学習形態）決定できるのです。そのとき、配慮しなければならないことがいくつかあります。その1つに、学校・学級における教育環境の配慮があります。例えば、グループ学習とT・Tと結び付けて行う場合、それらの活動に合った学習空間を考えておかなければなりません。2つには、「発問計画」・・・等。

では、学年による3人のT・Tと結び付いた「一斉学習」で効果のある「個別学習+グループ学習」の実践例をもとに「学習形態の工夫」を考えてみましょう。

【実践例】—小学校4年・算数—

- 1 単元名 「分数の表し方としくみ」
- 2 単元の目標 (略)
- 3 本時の目標
 - 測定値を帯分数や仮分数で表すことを理解する。【知識・理解】
 - 帯分数と仮分数の意味の理解を深める。【関心・態度】
- 4 展 開



実践例をもとに「どんな学習形態で授業を構成したらよいか」「学習形態を考える場合どんなことに留意したらよいか」についてまとめてみましょう。

どんな学習形態で授業を構成したらよいか

すべての子どもが学習した内容を身に付けることは、教師にとっても、子どもにとっても共通の願いです。しかし、子どもの実態を見ると、何人かの子どもが理解不十分でつまづいていることがよく見られます。

前掲の実践例は、そのような実態を踏まえたものです。

子ども一人一人が意欲をもって学習に取り組めるように、一斉学習、一斉学習+個別学習、T・Tによるグループ学習といった学習形態を工夫し授業を構成しています。

しかし、学習形態を工夫したからといって「分かる授業」「やる気を起こす授業」が創れるかという、それだけでは不十分です。学習形態の工夫を効果的にするためには、いろいろな学習活動（視聴覚教材による学習活動、話し合いによる学習活動、操作による学習活動等）を組み合わせることが大事になります。本事例は、個人差が大きいという学級の子どもの実態からグループ学習にT・Tによる習熟度別学習を取り入れています。

このように、どんな学習形態で授業を構成するかは、冒頭で述べたように子どもの実態把握と綿密な教材研究が基盤になりますが、それとともに3つの学習形態の特徴を知っておくことが大切です。（資料2）

【資料2】

	長 所	短 所
一斉学習	<ul style="list-style-type: none"> ○ 同じ時間に同じ速度で学習を展開することができる。 ○ 子ども全員に共通の学習内容が指導できる。 ○ 子どもの多様な見方、考え方を引き出し、集団思考ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもの学習活動がパターン化し、マンネリ化する。 ○ 子ども一人一人に、成就感や満足感を味わわせることが難しい。 ○ 学年が進むにつれて、個人差が拡大し、学習意欲が低下してくる。
個別学習	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもの知られざる面を発見し学習の場で生かすことができる。 ○ 子どもの行動を見つめる中で、新しい経験への欲求や成就感等をとらえることができる。 ○ 子どもの発達の度合いを確実にとらえることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教師によりとらえ方が異なり、子どもの活動に困難をきたす場合がある。 ○ 決められた時間内での指導が困難になる場合がある。
グループ学習	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学級全体の子どもを同時に指導する場合に比べて学習能率が上がる。 ○ 学習活動が一部の子どもに偏らない。 ○ 学習の到達度、習熟度の違いに応じて指導できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 能力別グループの場合は、子どもに優越感や劣等感を持たせるといった危険性がある。 ○ 場所の確保が困難である。

学習形態を考える場合どんなことに留意したらよいか

どんな学習形態を取り入れるにしても、教師と子ども、子ども相互の温かい人間関係が基盤になれば効果を期待することはできません。その上で、次のようなことに留意し学習形態を工夫をすれば目指す授業が実現できるのではないのでしょうか。

1 一人一人の子どもの実態を把握する

学習を進める上で、まずは子どもの実態を把握することから始めなければなりません。実態把握の仕方にはいろいろありますが、次の4つの視点から学習形態の工夫を考えて授業を創ってみましょう。

- 学習到達度の違い
- 学習速度の違い
- 学習タイプの違い
- 興味・関心の違い

→ 学習形態の工夫

2 ねらいを具体的にする

学習のねらい（何を）が不明確だと「どのように授業を創るか」（学習形態）ということが決まらないし、子どもの意欲も失ってしまいます。

そのためには、認知面・技能面・情意面から目標分析を行い、ねらいを具体的にすることが大切です。

3 教科・教材の持っている特性を知る

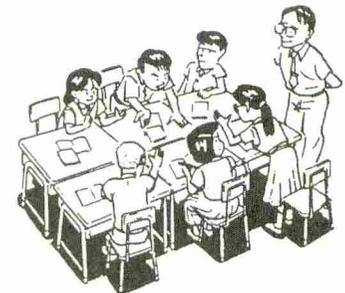
どの教科も、どんな教材も、どれも同じ方法で学習したのでは、子どもたちの興味・関心は薄れてしまい、ねらいを達成することはできません。各教科、教材の特性を知り、それに合わせた学習形態を考え、工夫することが大切です。

4 教師自身の指導力を考慮する

どんな学習形態で授業を展開するかは、教師自身の指導力とも深く関わります。子どもをみる目、指導のポイントの押え方等、教師自身が学ばなければならないことを一日も早く自分のものにする努力が大切になります。

5 学校・学級における教育環境を考える

教室の大きさ、設備、学級の子どもの数など、現在ある教育環境を最大限に生かして、学習形態を考えることが必要です。



⑭ クロスカリキュラムを作成して授業を創る

図画工作の授業中、子どもが自分のイメージに合った色で着色しようとするとき、「生活科で習ったアサガオの色水遊びの方法でやってみようよ。」と教科を意識しないで、学習したことを生かそうとすることがあります。

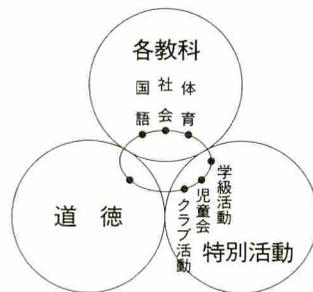
また、学習を進める中で、その教科に留まらず、他の教科の内容との関連を図り、自由で大胆な活動をさせたいと感じることがあります。

このような学習を進めるためには、教科間の連携を図る学習カリキュラム（クロスカリキュラム）を作成する必要があります。

クロスカリキュラムには「横断的な学習カリキュラム」と「総合的な学習カリキュラム」の2つが考えられます。

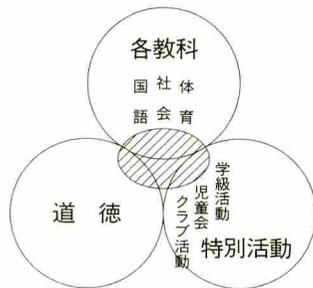
横断的なクロスカリキュラム

- 各教科、道徳、特別活動の内容をもとに各教科間の関連性を重視してカリキュラムを編成します。



総合的なクロスカリキュラム

- 各教科、道徳、特別活動を融合させて活動テーマを設定し、総合的な活動を展開します。各教科で学んだ知識や技能等を駆使して学習課題に取り組みます。各教科の発展、応用、実践の場であり、実践を通して教科の基礎的基本的な事項を学び直すことができます。



それでは、まず、総合的なクロスカリキュラムの作成の手順を示します。

1 「活動テーマ」を決める。

まず最初に、各教科等が融合された活動テーマ「ニュース番組『雪国の暮らし』を制作しよう」（次ページ参照）を設定します。活動テーマは子どもにとって身近であり、学習の最後まで興味・関心を持って積極的に調べられるものがよいでしょう。その際、「根雪について」「私たちの地方と比べて」等の多様な学習課題（解決方法）が設定でき、その学習課題を解決する過程で各々の学習内容の不十分なところを見直し習得できるテーマであることが大切です。

2 「学習の活性化」を図れる単元に再構成する。

一つの教科で学んだことが、別の教科の学習の中で生かされ、それが再びその教科に戻って生かされる（「学習の活性化」）ように単元を再構成する必要があります。教科の枠を越えて生かされる学習内容はやがて日常生活の中で生きて働く力となります。

総合的なクロスカリキュラムの単元再構成例

総合単元(4年)	指導時間	総合単元名(活動テーマ)	教科の単元と指導時間
単元 A(5月)	20時間	特派員になろう	・清掃工場の見学(国語・12時間) ・ごみと住みよいくらし(社会・8時間)
単元 B(9月)	19時間	お話を味わおう	・作品のおもしろさを(国語・13時間) ・飛び出せお話(図工・6時間)
単元 C(1月)	11時間	実験したことを図にまとめよう	・折れ線グラフ(算数・5時間) ・水・水蒸気・氷(理科・6時間)
単元 D(2月)	17時間	ニュース番組『雪国の暮らし』を制作しよう	・雪のあるくらし(国語・10時間) ・雪国の暮らし(社会・7時間)

3 「学習の効率化」を図れるようにする。

このような単元の再構成を図り、「学習の活性化」を進めていくと、重なっている指導内容を別々に扱わなくてすむようになり、効率的に学習が進められるようになります。

そのためには、年間の指導計画を各教科ごとに洗い出し、できるだけたくさんの連携の可能性を探っておかなければなりません。

次に、総合的なクロスカリキュラムによる展開例を示します。

1 単元名

「ニュース番組『雪国の暮らし』を制作しよう」（小学校4年）

2 目標

【全体の目標】 説明文をもとに、人々が気候や風土を生活に生かし、よりよい暮らしのために様々な工夫をしていることを調べることにより、その地方の生活についての認識を深めるとともに、調査した内容をビデオ番組に作り上げる過程で言語活動の能力を高める。

【国語科の目標】 文章の叙述に即し、段落相互の関係に注意して、文章の中心的事柄を読み取る。話す速さの間の取り方を工夫し、話したいことの中心が分かるように話す。

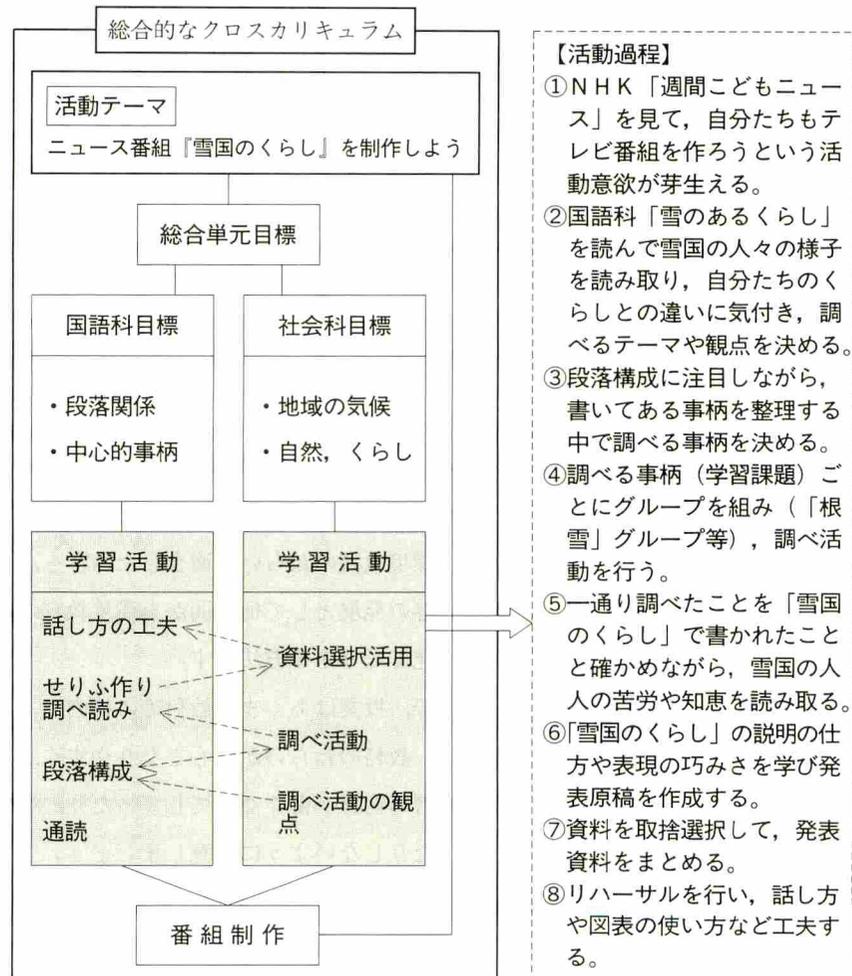
【社会科の目標】 日本国内の雪の多い地域の気候の特色や自然の様子、気候に適応した人々の様子を調べ、気候を生かした生活をしていることに気付く。

3 指導計画

総時間数17時間：国語科「雪のある暮らし」（10時間），社会科「雪国の暮らし」（7時間）

	児童の意識の流れ	国語科の学習内容	社会科の学習内容
I (4時間)	ニュース番組はどのようなことに注意して作ればよいのだろう。	調べるために類型化した項目と説明文の段落構成を比べて分かりやすい番組の構成や表現の仕方を大まかにつかむ。	雪国の暮らしを調べるためにどんなことを、どのように調べるか、見通しを持ち、調べる計画を立てる。
II (3時間)	雪国ではどんな暮らしをしているのだろう。調べてみよう。	説明文の構成に従ってどんな事柄が、どのように説明されているか話し合いを通して読み取る。	説明文を読み、雪国の暮らしについて調べる。
III (5時間)	調べたことをまとめて脚本を書くぞ。情報をもっと集めよう。	伝えたい内容が、聞き手に分かるようにするためには、どんな文章表現がよいか検討し、番組の脚本を作る。	計画に従って、雪国の暮らしについてさらに詳しく調べる。
IV (4時間)	みんなどんな番組を作ったのかな。分かってもらえるかな。	伝えたい内容が、聞き手に分かるようにするためにはどんな話し方がよいか、音声音調について話し合う。	雪国の暮らしを伝えるのに写真やグラフなどの資料を利用するときさらに分かりやすいものになることに気付く。
V (1時間)	自分たちの番組を完成させよう。	聞き手に分かりやすいように話し方に気を付けながら、番組を制作する。	

総合的なクロスカリキュラムでの子どもたちの活動過程をまとめてみましょう。



このようなクロスカリキュラムを作成し、子どもたち主体の授業を創るためには、教科間の連携、学習の活性化を図るとともに、子どもの意欲や関心を重視して自主的に追求できるようにすること、また体験を通して多様性に富んだ課題を解決できるようにすることが大切です。

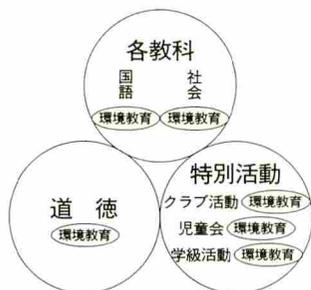
⑮ 環境教育を意識した授業を創る

環境や環境問題に関心を持ち、環境をよりよくしようとする力を育てる学校での環境教育がクローズアップされています。

各学校では、「ごみのゆくえ調べ」や「空き缶集め」等の活動が展開されてはいるものの、そのために授業時間が削られ、教科の目標が達成できないとの声も聞かれます。

このような反省に立って、これから求められる環境教育の授業の在り方として、次の3つのタイプが考えられます。

タイプⅠ…各教科、道徳、特別活動の各々で環境教育の学習を展開する。

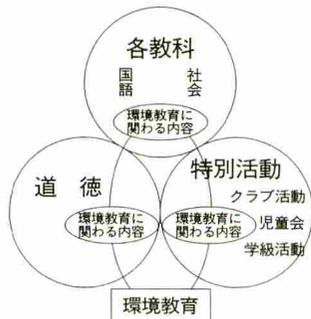


各教科、道徳、特別活動において、授業で適宜、環境教育のねらいに適合した内容を、学習内容の発展として何時間かを環境教育の学習に充てたりする方法です。

その際、授業はあくまで教科等の枠内であるため、教科のねらいが中心となりやすく、環境教育の内容が薄くなってしまったり、学

習指導要項の内容とかけ離れたりしないように注意しましょう。

タイプⅡ…各教科・道徳・特別活動の内容から環境教育に係るものを関連付ける。



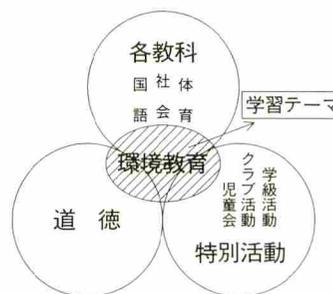
〈横断的に取り組む環境教育〉

環境教育のねらいから各教科等の関連性を重視して編成し、環境教育を行う方法です。

各教科等のねらいは別々ですが、一連の活動により教科領域を関連付け、子どもの見方や考え方を広げることができます。

タイプⅢ…各教科・道徳・特別活動を融合させ、総合的な学習を展開する。

〈総合的に取り組む環境教育〉



各教科、道徳、特別活動を融合させた環境教育に関わる学習テーマを設定し、総合的な活動の中で環境教育にねらいが達成できるようにします。調査研究、歴史的研究など、各教科で学んだ知識や技能を駆使して主体的に学習テーマに取り組むことができます。各教科

の発展、応用、実践の場であり、その過程で基礎的・基本的事項を学び直すことができます。

*「教育課程審議会（第1次）答申」では「総合学習」の中で取り上げることが期待されています。

環境問題は極めて幅広く、生活をする上で欠かせない問題であり、子どもたちにとっては、生涯に渡って関わりを持たねばならない大切なことです。

そう考えると、子どもたちが学習テーマを考えることで取り組みが主体的、意欲的になり、身に付けたことが普段の生活の中で生かしやすいことから、タイプⅢの総合的な学習展開が望ましいのではないのでしょうか。

次の実践例は、タイプⅢの総合的に取り組む環境教育の授業の在り方について考えたものです。

- 1 テーマ
環境と私たちの生活（小学校5年）
- 2 目標

自分たちの暮らし（生活）の中の環境や環境問題について関心を持ち、人間の活動と環境との関わりについての総合的な理解や感性を高め、環境の保全に配慮した望ましい働きかけをしていこうとする主体的な行動力を育成する。



3 指導計画（総時間数 12時間）

環境と私たちの生活		
各教科との関連	環境教育の目標・学習内容	資料等
社会 ・日本の食料生産 理科 ・植物の成長 ・メダカの成長 家庭科 ・野菜サラダを作ろう	○身近な環境に関心を持つ。 ○環境問題に関心を持つ。 ・環境の意味について全員で話し合い、環境問題として思いうかぶものをあげる。 ・調べてみたい問題別にグループを組む。 ・グループごとに環境問題について調べ発表し合う。 （2時間扱い）	・図書資料 ・コンピュータに入力された情報 ・環境に関する記事の切り抜き
国語 ・森林のおくりもの社会 ・日本の工業生産 ・工業の発達と公害 理科 ・天気の変化 ・ものをとくさそう 道徳 ・自然愛、環境保全	○産業と環境との関わりについて調べる。 ○自分たちの生活と環境との関わりについて情報媒体や体験学習を通して調べる。 ・学校の周りの環境を調査するための方法について、全員で話し合う。 ・校外での調査を行ったり、水などを採取したりする。 ・調べたことを他の人に知らせる方法について話し合い、掲示物等を作成し、提示する。 （6時間扱い）	
社会 ・国土の環境と人々の暮らし 家庭科 ・身の回りを整えよう	○これまでの環境保全の経緯をまとめる。 ○これからの自分や自分たちの社会に対して環境を保全するために必要なことを考える。 ・自分たちの生活の中の物や出来事と環境問題とのつながりについて、カードに書き出し、関連するものを結ぶ。 ・生活と環境問題とのつながりについて考える。 ○小学校環境レポートとして情報を発信する。 （4時間扱い）	

4 本時の目標（第5時、第6時）

(1) 目標

自分たちの生活している地域と環境とのつながりについて、調べる方法を考え、友だちと協力し合って調べる。

(2) 展開

評価の観点

（○関心・意欲・態度 △知識・理解 ◇思考力・判断力・表現力）

児童の活動	評価の観点と方法	指導上の留意点
自分たちでとってきたものを検査してみよう		
○空気の汚れ具合を調べるグ ○自分たちが調べたい内容の ○観察や実験の仕方等、何		

第 5 時	ループ ・採取した空気の汚れ具合や汚れ方を調べる。 ○木について調べるグループ ・木の種類と大きさから周りの環境に与えるメリットを考える。 （酸素供給量、温度調節、保水量等調べられるものを中心に） ○水について調べるグループ ・採取した水の色、におい、pH、COD値等を調べ、水道水や井戸水と比較する。 ○学校の周りの様子を他の地域と比べるグループ ・資料により、工業地域、農村山間部等と比べ、環境との関わりを考える。	結果について関心を持つようになっているか。 ○意欲的に、実験や調査に取り組んでいるか。 △自分たちの検査の内容について互いに理解して作業を進めているか。 ◇顕微鏡を適切に使っているか。 ◇コンピュータによる情報検索を上手にしているか。 ◇B T B 溶液や水質検査バックテストを使って実験しているか。	に焦点を絞ったらいかがであるかを考えることができるよう支援する。 ○他の地域の様子が分かる資料を用意し、自分たちの生活と環境との関わりが目が向くようにする。 【資料】 ・市役所等で作成された環境に関する刊行物 ・水道局、気象庁等の資料 ・参考資料 ・コンピュータに入力された環境についてのデータベース （教師作成） 【機器】 ・カメラ（地域の環境、採水場所、樹木等の記録） ・V T R（発表時にそのまま映し出せる） ・コンピュータ 【実験器具、薬品等】 ・水質検査バックテスト（COD） ・pH試験紙 ・B T B 溶液 ・顕微鏡、スライドガラス等
	調べたことを発表しよう ○各グループごとに、実験結果や調査結果を模造紙に書き、黒板にはり付けたり、OHPを使用したりして、5分くらいずつ、発表する。 ◇実験結果や調査結果を分かりやすく模造紙等にまとめているか。 ◇分かりやすく発表しようとしているか。 △○適切な質問をしているか。	自分たちの調べたことをいろいろな人に知らせよう。	○各グループの調べた事柄と自分たちの調べた内容との関連について考えながら、ノートに記録するよう指示する。 ○発表した内容や課題として残っていること等に気付くような質問をし、課題をとらえられるようにする。 ○発表のよさを振り返り、自分たちの調べたことをいろいろな人に知らせたいという意欲を喚起する。
	○家族、他のクラスの人たち、地域の人たちにも地域の環境を知らせるにはどうしたらよいかを考える。	○いろいろな人たちに知らせようという意欲を持って学習を進めているか。	

環境教育を行うとき、次のことを大切にしましょう。

1 子どもの経験や体験を取り入れる。

実践例のように「水を採取して水質を調べる」「木に触れて種類や大きさを調べる」等の子どもの経験や体験を取り入れることによって、子ども自ら自分の家庭や取り巻く地域の環境をとらえることができます。また、子どもがそれぞれの舞台での経験や体験の中で発表した問題を解決することによって、その問題の重要性や意味について考えることもできます。さらに、子どもがその環境問題について関わりを持ち、共生できるように環境に働きかけていくことも期待できます。

2 「身近なところから」問題を掘り起こし、それに対応していく実践的な態度を育成するようにする。

小学校中学年の子どもたちに地球温暖化、オゾン層の破壊、砂漠化、熱帯雨林の減少といった難しいことを学習させてはいませんか。理解が難しい内容を学習させても、子どもにとってはあまり意味がありません。実践例のように水の汚れやごみ問題等、身近なところに環境問題がたくさんあります。身近なところから問題を掘り起こし、「やれば改善できるぞ」という成就感を得ることで実践的な態度が育成されるのです。

3 環境教育の視点をもとに環境教育を行い、評価する。

環境教育は各教科、道徳、特別活動あるいは学校教育全体の目標を達成する中で環境教育のねらいに迫っていくものです。従って、環境教育の視点（「環境から学ぶ」「環境のために学ぶ」「環境について学ぶ」次ページ参照）から学習内容に迫り、どのようなことがどれくらいできたかを評価しなければなりません。実践例では、展開案の中の「評価の観点と方法」の項目の欄に環境教育についての評価が明確に書かれています。

【環境教育の視点】

環境教育の視点	評価の観点	評価の項目
環境から学ぶ	○環境への関心・意欲・態度	○自然環境への興味 ○環境を保全していこうとする心情
環境のために学ぶ	○環境に関わる思考力・判断力・表現力	○環境への望ましい働きかけができる思考力・判断力 ○環境について調査し、その結果を適切に表現する能力 ○環境に対する責任ある行動力 ○環境に関わる問題を解決する能力
環境について学ぶ	○環境についての知識・理解	○自然環境についての理解 ○環境問題についての認識

次に総合的に取り組む環境教育の単元例をいくつかあげてみますので、これを参考にして先生方の学校でも作成してみましょう。

総合的に取り組む環境教育の単元構成例

学習テーマ	学年	関連する教科の単元と指導時間
地域の○○川を美しく	5年	・ごみ収集（社会・8時間） ・水の中の生き物（理科・7時間） ・生活排水（家庭・2時間） ・協力の大切さ（道徳・1時間） ・環境浄化活動（特別活動・2時間）
健康な生活を営むには	6年	・健康な生活（保健体育・6時間） ・ヒトと環境（理科・4時間） ・冬のくらし（家庭・10時間） ・研究発表大会（国語・10時間）

子どもたちが環境をよりよくしようとする力を高めていくためには、教師は、子どもたちの身近な生活の中から問題点を見つけ出し、環境保全のために何かをやってみようとする意識を持てるようにしていくことが大切です。

そのためには、まず、教師が美しい環境を整え、美しい環境に感動する心を持ち、それによって子ども自身の感受性を高めていくようにしましょう。

⑩ 国際理解に通じる授業を創る

身近な地域に外国人の姿を見かけることが多くなり、外国の言葉をよく耳にするようにもなりました。

また、外国人の子どもが通学している学校も少なくありません。

一方、日本人の海外旅行経験者や海外での生活経験者の数も増えていて、右の作文を書いた中学生も香港生活の貴重な体験を「自分のものの見方・考え方」に取り込んでいます。

こうした国を超えての人々の交流に加えて、インターネットをはじめとする通信の発達で、国々とその人々を近づけ、ボーダーレスの国際社会が具体的に見えるようになってきました。国際化が進む時代に生きる子どもたちにとって、国際理解教育は急務になっているのです。

しかし、世界には193の国があり、その全ての国々や人々との交流、全ての異文化理解、全ての言語教育は不可能と言えます。

そこで、日々の授業の中で「国際理解」を意識し、教科のねらいと同時に「国際理解」の目標も達成できるような授業を工夫していくことが必要になるわけです。

私が香港で考えたこと

西田 元明
(新宿区立西戸山中学校 3年生)

あれは4年ほど前のことだった。私は父の転勤で香港で生活することになった。香港の生活に慣れた頃から市場へ行くことがあったが、その時の印象が強く残っているの、そのことについて語ろうと思う。

野菜市場で印象に残っていることは、土のついたままの野菜と中国からやってくる太ったおばさんのことである。野菜は日本と違って土のついたまま商品にしているが、野菜の作り方が分かったので、私にはかえってよかった。日本の売り方とずいぶん違うと思った。

太ったおばさんには、値段をごまかされたことを思い出す。日本人だとおもわれると値段が倍になることもある。

肉市場では血や脂でぬめった店の床が印象に残っている。腹を開かれた豚が転がっていたこともある。街では鳥の丸焼きが天井からぶらさがっている様子もよく見られる。

私は「これこそ人間の真理」だと思った。魚市場は威勢がよかった。水から出してはさばいていた。レストランでも同じような光景が見られた。ある時は首のないうなぎがうねっていたが、残酷なようでも新鮮な感じがした。

市場から出た私はすっかりリフレッシュされていた。

それは、本当の人間の営みを見たからではないか。香港には人間の活力が人々の行動にあらわになっている。

以下 省略(「教育じほう」1995.6月号)

外国との関わりを意識できる身近な教材を使って



では、小学校3年・社会、「わたしたちのくらしと商店」の学習の中で、「外国の果物」を取り上げた例で考えてみましょう。

スーパーマーケット「しなものが生まれたまち」(東書) 小学校3年・社会 第1次 9/18時間

学習活動・内容	国際理解に通じる授業にするための視点
<p>1 スーパーで売られている果物や野菜について話し合い、めあてをつかむ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>スーパーで売られている果物や野菜は、どこでできて、どのように運ばれてくるのだろうか。</p> </div> <p>○ 商品のラベルや段ボールの箱の表示から、産地を探って調べようとする。</p>	<p>○ 商品のラベルや段ボールの箱の産地表示部分などを事前に(各自)集めておく。(必要に応じて教師も)</p> <p>○ みかん、ほうれんそう、なす、ピーマン、オレンジ、バナナなどを提示する。</p> <p>◎ 外国から送られてきている果物があることに気づくようにするため、バナナやオレンジを準備したい。</p> <p>◎ 外国のものや遠い県のものなど、特に提示したいものは用意しておく。</p>
<p>2 商品のラベルや段ボールの箱の表示から、品物はどこで作られ、どうやって運ばれてくるか調べたり、予想したりして絵地図に表す。</p> <p>(1) 生産地の場所 遠くの県でできている外国のものもある……</p> <p>(2) 品物を運ぶ方法 トラックで運んでくる 船に積んで港まで運んでくる 飛行機もあるかもしれない</p> <p>(3) 市場や問屋 農家の人や工場の人が運ぶのか スーパーの人が買いに行くのか</p>	<p>◎ 「先生、これ、どこかわからない。」 「英語みたいので書いてある。」 など、子どもたちの気付きを大事にする。</p> <p>◎ バナナやオレンジは、初めから外国産であるとする子どももいるので、そう考える理由も尋ねるようにする。</p> <p>◎ この学習では、どこの国かということを明らかにする必要はない。子どもから「アメリカ」「フィリピン」などの国名が出たときに「アメリカから運んでくるんだ」という程度の取り上げ方でよい。</p>
<p>3 各班で作った絵地図を発表する。</p> <p>4 「バナナのたび」や「ぼくはみかん」などの題で、学習のまとめを書く。</p>	<p>○ 自分が一番興味をもった野菜や果物を取り上げ、その物になったつもりで書くようにする。</p>

スーパーの商品の中には外国から運ばれてくるものもあるということは、3年社会科の学習内容です。したがって、いわば当然の学習をしているのですが、この事例のように「意識的に取り上げていく」ことが大事なのです。

子どもたちに「外国からの食べ物や品物をより身近に感じ、関心をもって見ていこうとする」態度を育てようとしています。

他教科との関連を図って国際理解を深める

先の事例は、教科内容にもなっ

ている「国際理解」に関する内容をクローズアップするというものですが、次は、他教科との関連を図りながら、「国際理解」を強調した例です。

『アジアの働く子供たち』（光村）「読書」中学校・2年国語

主な学習活動	時間	国際理解に通じる学習を支援するための視点
1 題名から、書かれている内容を想像し、発表する。 2 現在のアジアの国々の人たちについて知っていることを発表する。 3 家でどんな手伝いをしているか発表する。 4 全文を通読する。	1/3	◎ 地図帳、社会「地理」の教科書と学習ノートを準備する。 教材文のマレーシアの子供の働く様子と生徒一人一人の日常生活を比較することで、「違い」が実感できるようにする。
5 感想をまとめる。 6 感想を発表する。		「かわいそう」といった感想だけでなく、同じ人間として痛みを分かち合える感性や人権感覚が持てるように、その国特有の状況や彼らの人間的な魅力を確かに読み取る。
7 アジアの一員として、自分はどういうに生きたらよいかを考え、まとめる。	2/3	
8 自分の考え方を広げ、深めるために、次にどのような内容の文章を読みたいか発表する。		国語科「読書」の目標として「主体的な読み手の育成」や「社会的視野の拡充」「読書生活の充実・発展」などがあるが、生徒と同年齢のアジアの子供たちの厳しい生活を読み取るだけでなく、その生活は日本の消費生活と深いつながりがあることを考えさせ、自分たちの生活を見直す機会となるようにしたい。
9 「本は二重に読む」を読み、自分の読み方を発表する。	3/3	

中学校社会科「地理」の『東南アジア』の学習との関連を考えて

ある中学校の指導計画には、中学1年の10月に「東南アジア」の学習が位置付けられています。社会科では東南アジアの国々の歴史や地理、そして文化などについて学習をしますので、事例の『アジアの働く子どもたち』（3時間）を1年で学習できるようにするとか、あるいは、社会科の指導計画を工夫して「東南アジア」を2年で学習できるようにするといったことで、同じ時期に取り扱うようにすることもできます。

社会科の単元「東南アジア」では、宗教の問題から自然、あるいはプランテーションの農業、日本企業の進出、輸出入の関係などを学習します。日本とのつながりは、ある地理的な内容に限っています。そこに「アジアの働く子供たち」の姿や気持ちがわかる国語教材を関連させることは、東南アジアの国々の地理だけでなく、人々の心の理解にも有効であると思います。

体験的（模擬）な学習を通して

ある中学校の調査では、外国旅行

経験者は175名中7名でした。国際理解は、実際に外国に行くことに勝るものはありません。できれば、多くの外国人と交流を持ち、同じ地球人として理解しあえることが大事です。しかし、現実にはなかなか難しいことです。そこで、次には、「アメリカに行って～したい」という模擬旅行活動を取り入れ、アメリカをより身近に感じる社会科授業の事例を載せました。

『さまざまな地域 アメリカ合衆国』（東書）中学校1年・社会（地理）

学習指導計画の概要	国際理解に通じる学習を支援するための視点
1 アメリカについて知っていることやイメージを出し合う。 2 ビデオを視聴し、アメリカのイメージを膨らませる。 3 ビデオの感想を書き、これからの学習の参考とする。	社会科では自然、歴史、産業、文化などの知識を獲得する学習になりがちなので、生徒がすでに持っているアメリカのイメージを学習のきっかけにし、親近感に支えられた問題解決意欲を喚起する。 コココーラ、メジャーリーグ、フォード、ディズニールランド、マクドナルド、IBMなどから受けるイメージの他に、人種問題や暴力、麻薬といった方向のイメージを持つ生徒もいる。ビデオにより客観的な情報を提供する。ビデオの内容は：自然、歴史・文化、農業、工業・大企業、日本との交流
1 前時の事実や疑問をもとに学習課題を設定する。 私は、アメリカの（ ）へ行って（ ）を調べたい。 ※ 英語科と連携し、各自の課題を英語の時間に英訳する。 ※ 調べた内容について、可能な限り英語で表現できるようにする。 ・ 内容の似ている者同士でグループを作る。	課題の英訳により、言語の違いに関心が持てるようにする。例：生徒＝I、調べたい、人種問題について、New Yorkで、英語担当の教師の指導で＝I want to study the racial problem in New York. アメリカに着いてからの「英会話」についても、関心を持ち必要な「英会話」には進んで取り組むようにしたい。
2 旅行に行くまでの計画を立てる。 3 パスポート申請を行う。（模擬）	旅行計画では、次の点を調べる。 ・ 出発日：12月23日、出発時刻 ・ 旅行地の季節を考えた持ち物・服装 ・ 利用する飛行機（航空路） ・ 往復の運賃 ・ 所要時間、到着時刻（時差）
1 課題に対する予想を立てる。 2 課題解決のために必要とする資料を検討し、収集、選択をする。 ・ アメリカ合衆国に関する様々な資料を各自が集めておく。 ・ グループで資料を交換する。	旅行計画ができたグループからパスポートの申請の用紙に記入をする。

以下省略

このような「国際理解に通じる授業」の積み重ねは、「総合的な学習の時間」に例示されている「国際理解教育」につながることでしょう。

⑰ ロールプレイングを導入して授業を創る

今、子どもたちに人気があるものの一つにテレビゲームがあります。中でもロールプレイングゲームと呼ばれる種類のゲームが大人気ようです。どうして子どもたちは熱中するのでしょうか。人は誰でも物語の主人公になりたいという願望がありますが、このゲームでは、まさに自分が主人公になれるからです。授業でもこのように子どもたちが熱中し、主人公になれたら素晴らしいですね。

ロールプレイングは、普通「役割演技」と訳されています。一口で言うと「即興劇」で、せりふが決まっていなため、演者の考えがそこに表れます。

ところで、道徳の授業を振り返ったとき、子どもたちが本音で話し合うことが少なかったり、登場人物の心情を深く理解しないために話し合いが盛り上がりなかつたことはありませんか。また、もっと資料の主人公の心情の読み取りや価値葛藤の場面で子どもに本心（本音）を出してほしいと思ったりすることはありますか。

ロールプレイングを導入すると、そのような心配も薄れ、子どもの多様な価値観が表れて話し合いが深まり、内面化が図られることが多いようです。

ロールプレイングを導入した授業の例（道徳）

この実践例は、文部省中学校道徳教育推進指導資料1の「裏庭でのできごと」という読み物資料を使用したものです。主人公の健二が、友人の大輔たちがガラスを割ったことを先生に正直に報告するかどうか悩んで、そのことを大輔に話す場面でロールプレイングを導入しています。

展 開

学習活動・教師の主な発問	ロールプレイングを導入する際のポイント
<p>2 資料を読んで話し合う。</p> <p>(1) 登場人物の印象について話し合う。</p> <p>(2) サッカーの練習を終えて、次の日、登校するまでの健二の気持ちを話し合う。</p>	
<p>(3) 健二が次の日、学校で大輔に話をする場面を想定し、ロールプレイングする。</p> <p>① 自分の席で、隣の友だちとロールプレイングする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>T 「健二から大輔に話しかけるようにします。そのとき、『僕はこれから本当のことを先生に言いに行くよ。』で始めましょう。」</p> </div> <p>② 代表が前に出てロールプレイングをする。</p> <p>③ 役割を交代して、逆の立場のロールプレイングをする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>T 「今度は役割を交代して逆の立場で演じてみましょう。」</p> </div> <p>(4) 演者、観客それぞれの感想を基に話し合いを深める。</p> <p>① 演者が感想を発表する。</p> <p>② 観客が感想を発表する。</p> <p>③ 感想の発表が終了後に主人公健二が決心したことについて、その理由と、なかなか決心がつかなかったことについて考え、話し合う。</p>	<p>○ 健二から大輔に話しかけるという設定でロールプレイングするが、初めのせりふは教師が用意し、生徒がスムーズにプレイすることができるようにする。</p> <p>○ 多様な価値観に触れるようにするために、いくつかの組に発表してもらう。教師が意図的に発表者を指名し、内容の重複を避けるようにする。</p> <p>○ 大輔の役を教師が務めることも一つの方法であり、教師も積極的に関わるようにする。</p> <p>○ 逆の立場に立つことにより、視野が広がり、物事の背景をも考えられるようになります。</p> <p>○ 1組の発表が終了したら、プレイをした生徒が感想を述べるようにし、次に見ていた生徒が感想の発表を行う。（新鮮な感想を述べてもらうため）その後、2組目のプレイの発表を行う。感想の発表は1組目と同じように行うとよいでしょう。</p> <p>○ どんな感想も尊重する姿勢を教師は堅持していく。また、それらをメモすることも、その後の話し合いを焦点化するのに必要です。それにより、生徒が友だちの発表をきちんと聴き、活発な意見の発表へつながることになります。</p>

この実践例で参考になるのは次のようなことです。

一つ目は、ロールプレイングを取り入れることにより、疑似体験を通して主人公の心情に深く追れるようになることです。この場合、健二の立場、大輔の立場を文章を読んだだけの場合と比べてよく考えられるようになります。即興劇という場面の中で自然に、この資料の中での健二と大輔の関係を自分たちの日常生活に置き換えて考えられるようになることが期待できます。

二つ目は、ロールプレイングの最初のせりふを教師が用意していることです。その結果、子どもたちはスムーズに次の言葉が浮かび、ロールプレイングがやり易くなります。最初のきっかけが大事だということです。

また、教師が積極的に参加することで、教室の中に一体感が満ちてきます。この授業のような場合は、大輔の存在が主人公健二に大きく影響します。そのような場合は教師が大輔の役を演じることで健二と大輔のやりとりが深まりのある内容になると思います。

三つ目は、いきなり代表を選んで前に出て演じてもらうのではなく、自分たちの席で隣の席の者と組んで、練習的に即興劇を行っていることです。教師はその様子をさりげなく見ていて発表の時に対照的な価値観の表れている組を意図的に指名します。多様な発表があれば、それだけ話し合いも深まることとなります。

四つ目として、この資料のような内容の場合は、役割交代で二人の代表にそれぞれ逆の立場を演じてもらうようにすることが互いの心情を理解する上で効果的です。役割交代はロールプレイングを用いた授業の場合、とても大切な方法です。それは、相手の立場でものを考えることが実体験できるからです。

<ロールプレイングを導入して授業を創る際の留意点>

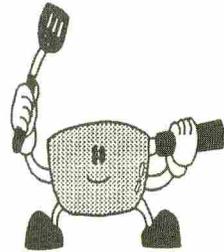
- 1 子どもの発達段階をよく考慮して導入することが大切です。例えば、小学校の低学年の場合であれば、さほど抵抗なく取り入れることができるでしょうが、高学年や中学生であれば道徳の授業だけではなく、学級活動の時間、朝や帰りの時間を利用してウォーミングアップをしておく効果が上がります。ジェスチャーやミラーリング（鏡ごっこ）などの簡単なゲームや、2～3人での即興劇等を繰り返し行うことは絶対に必要なことです。
- 2 演技がうまいとかうまくないとかは、ロールプレイングのねらいには直接関係がないことなので、子どもたちにこの点を強調しておくことが大切です。ですから、演技がうまくできてほめ過ぎないようにしましょう。
- 3 役割交代によって違う立場を経験することにより、片側だけからの思考が逆の側からの視点も入り、幅の広い物の見方が実感でき、その後の行動に大きな示唆を与えることとなります。
- 4 教師が積極的に参加し、子どもが安心感を抱けるようにすることも大切です。このような教師の姿は、子どもにとって良い見本となります。また、恥ずかしがり屋の子どもの場合には、教師がスピーカーの役を務めてあげることも効果的でしょう。

※ ロールプレイングには遊び的要素があります。子どもが楽しく、気軽に取り組めるように実施することが大切です。



⑱ 家庭や地域の教育力を生かして授業を創る

家庭科の授業では、その学習素材を子ども日々の生活に直接関わる場所から求め、学習の成果を子ども一人一人が日々の生活の中で実践していくことが大切です。



学習内容に対する子どもの興味・関心を高め、実践的な態度が身に付くようにするために「家庭や地域の教育力」は、大いに活用したいものです。家庭や地域の教育力を生かすには、教室に地域の方々に来ていただくという方法や教室を地域の中へ移動するという方法がありますが、いずれにしても教師一人の指導に勝る成果が期待できると思います。このことは全ての教科について言えるわけですが、家庭科においても、家庭の教育力、時には地域の教育力を導入して、子どもたちにより身近で説得力のある授業を計画することが大事だと思います。

ここでは、中学校2年・家庭科の「食物」の単元で、家庭や地域の教育力を生かして授業を創るという実践を考えてみたいと思います。

生徒一人一人が自分の食生活に関する課題を自分のこととして真剣に受け止めて学習し、その成果が実践に結び付くことを願い、保健婦さんの協力をお願いしました。

食物	
1	わたしたちと食物
2	わたしたちと栄養
	(1) 私たちの体の特徴と必要な栄養素を考えよう
	(2) 食品と栄養素の関係を知ろう
	(3) 食品群別摂取量のめやすを知ろう
3	よい食生活とは
	(1) 食事の内容を検討しよう
	(2) 食生活を見直そう…………… 右ページに事例
	(3) これらの食生活を考えよう
4	調理の計画
	(1) 食品の選択について考えよう 93ページに事例
	(2) 調理実習の計画を考えよう
5	調理実習
	(1) 米の調理をしよう
	(2) 汁ものの調理をしよう
	(3) 肉・魚の調理をしよう
	(4) 野菜の調理をしよう
	(5) めん類の調理をしよう
	(6) 小麦粉を使った菓子の調理をしよう
6	これからの食生活

「これからの食生活」を「調理実習」後に学習する

村の人たちの健康や病気、食生活に詳しい保健婦さんに来ていただいて、家庭科の先生と保健婦さんによる次のようなT・Tの授業を行いました。

学習活動・内容	保健婦さんとのT・Tにかかる内容	
	◎ 保健婦さん	○ 家庭科担当教師
1 本時の学習課題をつかむ。 缶ジュース1本、インスタント味噌汁お椀1杯には、砂糖、あるいは食塩が何gくらい含まれているだろうか。 (1) 経験から糖分と塩分を予想する。 (2) 実際に計ってみる。……………	◎ 糖分、塩分の測定指導 レモンジュース 250cc 味噌汁 180cc ◎ 糖分計・塩分計の使い方 測定 14.0% 1.2% 砂糖の量 35.0g 食塩の量 2.2g	○ 保健婦さんとのT・Tで学習することを説明する。 ○ 課題提示 ○ 教材準備 ○ 予想を聞く ○ 測定 (個別指導補助) ○ 測定結果の発表 ○ 話し合いの内容方法、まとめ方の指導
2 糖度計や塩分計で実際に測定した結果から、「砂糖」や「塩」の摂取量について関心を持ち、調べ、話し合う。 (1) 糖分・塩分の多い食品を調べる。 (2) 砂糖の望ましい摂取量を考える。 (3) 食塩の望ましい摂取量を考える。	◎ 糖分・塩分の多い食品とその量を説明する資料 ◎ 1日30gがめやす ◎ 1日10g以下 即席食品やスナック食品に含まれる塩分と油分についての資料を提示	○ グループの発表
3 糖分、塩分の摂取量についての考えを発表し村の保健婦さんのお話を聞く。 (1) グループごとに調べた結果を発表する。 (2) 保健婦さんの話を聞く ① 間食の問題に気付く ② 目に見えない食塩が多く食品に含まれていることがわかる ③ 食事のバランスや生活リズムの大切さがわかる	◎ 村の健康の仕事に携わっている立場から、生徒の食生活にかかわりのある話をする。 ・ 新聞の見出しの「子どもにも成人病」の話題 ・ 村の検診時に調査した「味噌汁」の塩分測定の結果を地区ごとにまとめた資料の説明 ・ 食塩の取りすぎは高血圧の原因になる。 ・ 食生活は習慣でもあるから生活リズムが大事 ・ 成長期に取りたい食品群が不足しないこと ・ バランスよく規則正しく、しっかり食事する	
4 保健婦さん宛に手紙の形で学習のまとめを書き、次時の学習計画を話し合う。		○ 学習のまとめ方と発表の指導

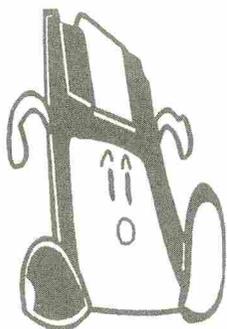
この授業では、村の保健婦さんから、村の「検診」の際に各家庭から持参

した「味噌汁」の塩分を測定してきた結果の資料が提示されました。これは地区ごとに集計されていて生徒の興味を引きました。

また、保健婦さんの指導により、はじめて糖度計や塩分計を使って測定したので、「甘さ」や「しょっぱさ」の感覚的認識がより科学的になり、食生活を見直し、改善しようとする生徒の態度形成に効果的であったと思います。

地域の人々の知識や技術を授業に生かせるのは、先の保健婦さんや後に述べる栄養士さんといった「公」の仕事に携わる人だけではありません。郷土の歴史に詳しい方、ボランティア活動の実践を長く続けている方、時に、天文学とか生物学、あるいは音楽、美術などに秀でた人でもよいでしょう。

地域の人々が持つ知識や技能を積極的に活用することは、生徒の学習効果に大きく影響するだけでなく、学校と家庭や地域の信頼関係を深めるためにも効果があると言えます。



もうひとつ村の給食センターの「栄養士」さんを学校に招いて授業をした例を紹介しましょう。

村の栄養士さんが、各学校の給食の献立づくりにコンピュータを活用していましたので、「食品の選択について考えよう」という内容の学習に、栄養士さんを招いて「コンピュータを利用した献立の作成」に関する指導をしていただいた実践例です。

献立づくりに関するソフトの紹介

- ・ 中学校技術・家庭科シミュレーション教材「栄養計算」＝日立中部ソフトウェア
- ・ 栄養計算Ⅰ（中学校技術・家庭科）＝日陶科学
- ・ 中学校・高校栄養計算＝GAKKEN
- ・ 栄養計算ソフト＝東京書籍
- ・ パソコンによるクッキングメイト＝一橋出版 など

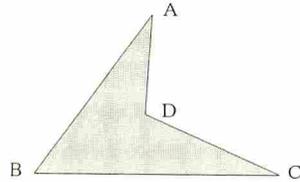
学 習 活 動 ・ 内 容	○家庭科担当教師と◎栄養士さんのT・T内容
1 食品群別摂取量のめやす及び概量の復習をする。	○ 食品群と栄養素の関係や食品群の分類について学習した時間の資料を提示し、内容想起の支援をする。
2 わたしたちの食事について、コンピュータを用いて栄養のバランスを調べる。	○ 調べたい食事について前もって考えているか、材料食品群に分類できているか、確認する。
3 栄養素の過不足を調べ、バランスのとれた食事を考える。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> コンピュータ＝LANシステム ソフト＝「献立の検討」熊本県教育センター </div>
○ コンピュータの操作法の説明を聞く。	◎ 栄養士が説明
・ スタート 電源の入れ方、フロッピーの入れ方、メニューの選択、キーボードの操作	◎ 家庭科担当教師が説明
・ LANシステムの活用法	◎ 栄養士が説明
・ END ストップ、フロッピーの出し方、電源の切り方	○ 班で協力して入力することを助言する。
○ 1食分を入力し、栄養価をレーダーチャートで表示する。	◎○ LANシステムの活用で積極的に質問ができるようにする。
・ 栄養素の過不足を確かめながら入力する。	○ 各グループのグラフとその問題点を発表できるようにする。
・ グラフを掲示する。	◎○ 献立を修正するための考えについて助言する。
○ 栄養の過不足を修正するためにはどのような工夫をすればよいか考える。	◎○ 1食分ではなく、1週間で栄養のバランスを考えてもよいこと。（食生活改善のアドバイス）
4 栄養士さんの話を聞き、「栄養士さんへの手紙」の形で学習をまとめる。	

〔中学校技術・家庭科指導細案『食物・被服』河野公子編著（明治図書）より〕

栄養士さんの持っている専門家としての知識や技術は、生徒の興味・関心を高めるだけでなく、食生活を科学的な視点から見直してみようという意欲にもつながったと思います。特に、コンピュータで栄養価をレーダーチャートに表す活動には、男子生徒が積極的に取り組み、女子生徒に説明する場面もあって、男女共学の家庭科のよさを期せずして見ることができました。また、食品名とその量を入力すると、瞬時に栄養価のレーダーチャートが現れることに生徒は感動し、栄養素の過不足を具体的に、しかも視覚的に理解することができました。

19 授業時間の弾力化を図って授業を創る

凹四角形



(図1)

中学校2年・数学の授業で、多角形の外角の和が 360° であることを確認し合い、授業を終えようとしたときのことで。

A男が立ち上がり、「先生、『どんな多角形でも 360° 』って言ったけど、たとえば凹四角形のような場合でも 360° ですか?」と真剣な表情で質問してきました。それを聞いた他の生徒も何か釈然としないものを感じたようで、中には分度器を取り出し、図1のような四角形をかいて角度を測り始めている生徒もいます。

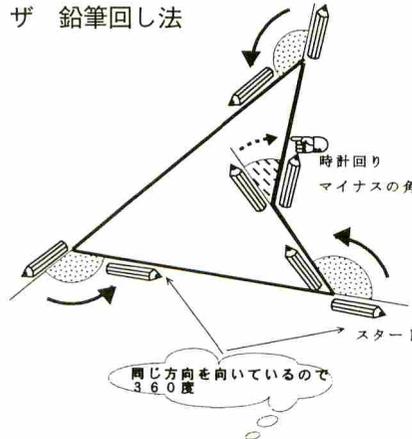
「先生、凹四角形の外角っていったいどこなんですか?」「コンピュータで調べられないかな…」

生徒の追究意欲はどんどん高まっています。

生徒たちの強い要求に応えるため、次の時間の英語の先生の協力で数学の授業を続けることにしました。生徒たちは、話し合いをしたり、コンピュータを活用したりして、これまで学習した追究の方法を駆使して、意欲的に外角の和を求め始めました。

その結果、角を回転と考えると負の角を考慮することができること、負の角を認めれば凹四角形の場合についても外角の和が 360° になること、さらに、

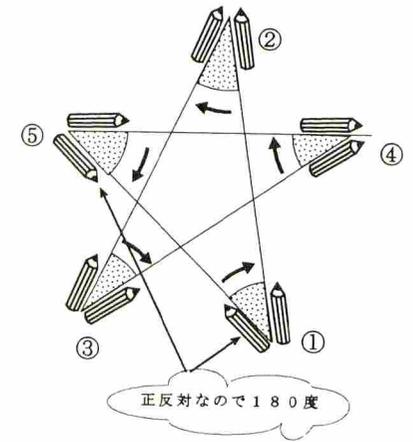
ザ 鉛筆回し法



(図2)

角を回転と考えることによって直観的な理解に有効な「鉛筆回し法」という新たな方法(図2)を生み出すことができたのです。

このような学習を終えた後、図3のような星形の図形の角度の和を求める問題にも「鉛筆回し法」が使えることに気づき、さらにいろいろな問題に適用してみようとする生徒も見られました。



(図3)

このように、「もっと授業を続けて子どもたちの学習意欲を満たしてあげられたら…」とか「時間不足のためにめあてが十分達成できなかった」などと思ったことはありませんか。

私たちは、A男のように自ら疑問を持ち、その解決に向けて意欲的に取り組むような子どもを育てたいと考えています。そのためには、子どもの疑問を取り上げ、考えを深められる時間を十分に保障することが大切になります。

学習指導要領の総則第3の(3)に1単位時間の弾力的な運用について、次のように書かれています。

……なお、各教科等の特質に応じ、指導方法の工夫によって教育効果を高めることができる場合には、各教科等の年間授業時数を確保しつつ、適切な計画のもとに1単位時間を弾力的に運用することができる。

つまり、1単位時間は教育効果を高められれば、必ずしも標準時間にこだ

ならず、弾力的に運用できることになっています。

この事例では、授業時間を延長したことによって、子どもの学習欲求が満たされ、思考が連続して、当初の予想以上の成果が得られた例ということができます。このように、授業時間を弾力的に運用することによってねらいが確かに達成される場合には、45分・50分という時間の枠にとらわれない授業を積極的に導入してみましょう。その際、次のようなことに配慮することが大切です。

【授業時間の弾力化を図った授業を創るには…】

1 授業時間の弾力化が必要な内容かどうか十分に検討する。

教師の恣意によって授業時間を延ばしたり縮めたりするのではなく、学習内容やそのために必要な活動を十分に検討することが必要になります。

単元全体を見通すとともに、年間計画のどの単元のどこを弾力化すれば、どのような効果が期待できるかの見通しを持つことが大切です。



2 授業を終えたら、子どもの思考傾向や学習意欲を検討するとともに所要時間を週案等にメモし、次年度の年間計画、週指導計画に反映していく。

普段から授業後の反省を週指導計画や年間指導計画に書き込み、弾力的な運用が必要な箇所を明らかにしておくことが必要です。そして、次年度の計画立案の際に、授業時間の弾力的な運用について、学年や学校全体で話し合い、共通理解しておくようにしましょう。

3 週ごとの運用で工夫する。(中学校)

単元全体を見通して、あるいはそれまでの授業の流れから、時間の枠を越えて学習活動を計画したい場合は、教科担当同士の話し合いのもとに、例えば図4のように週ごとに時間の運用を図るとよいでしょう。

通常の時程

1	理科 50分
2	英語 50分
3	国語 50分

翌週の時程 ← → 翌々週の時程

4 子どもの学びの保障を第一に考える。

形式的に運用するのではなく、運用の目的を「子どもの学び」を根底に置くという共通理解のもとに実施することが大切です。

1	理科 75分	1	理科 25分
2	英語 25分	2	英語 75分
3	国語 50分	3	国語 50分

(図4)

自分の担当する教科のみを考えるのではなく、“よりよい学び”を子どもたちに保障するという観点に立って、教科を越えてお互いが協力して進めていくようにしましょう。

授業時間の弾力化を図って、子どもの学びが最大限に生かされるようになるためには、アンテナを高くし、普段から子どもの願いやつぶやきを把握するように心がけることが大切です。そしてそれを授業に取り入れることにより、子どもたちは時間の運用を自然な形で受け入れ、時間を有効に活用するようになります。

特殊な条件下でなくとも、現行の制度の中でも授業時間の弾力的な運用は可能だと思います。自分の学校の実態に合った弾力化に挑戦してみましょう。

② 感動と共感で授業を創る

さだまさしの作品に「償い」という曲があります。

美しいメロディーによってドラマチックな物語が展開されます。



ゆうちゃんは、交通事故で男の人をひき殺してしまいました。

それ以来、ゆうちゃんはずっと謝罪のためのお金を送り続けます。

そして7年目……、「人殺し、あんたを許さない。」と、ゆうちゃんをののしった被害者の奥さんから、やっとゆうちゃんの誠意を認めた手紙が届きます。

こうしたゆうちゃんの誠実な生き方を見ていた親友は、加害者であるゆうちゃんと、ご主人を亡くした奥さんの両者の生き方に共感し、こう言うのです。「人間って哀しいね だってみんなやさしい それが傷つけあってかばいあって 何だかもらい泣きの涙がとまらなくて とまらなくて とまらなくて」と

これらの内容が、親しみやすいメロディーと音の強弱、繰り返しによって印象的に展開し、人間の弱さや強さ、そして人間としての生き方について感動的に語りかけてくる曲になっています。

道徳の授業では、副読本や読み物資料集を使うことが多いようです。しかし、日常生活の中にも、教師が感動した音楽、さわやかさが心に残る新聞記事、胸が痛むようなテレビのドキュメンタリー番組の中などに、子どもたちに伝え、子どもたちと一緒に考えていきたいと思う資料が数多くあります。

ここでは教師自身が感動し共感した、「さだまさしの『償い』」を資料として道徳の授業を創った例を紹介します。

《実践例》

生徒の心をゆさぶり、感動と共感のあふれる中学校・道徳の授業

- 主題名 人間愛（内容項目3-(3)）
- 資料名 「償い」（さだまさし、作詩・作曲）
- ねらい 人間の持っている弱さや生きていく上での苦しみを乗り越えていくすばらしさを共感的に理解し、深く広い人間愛と人間として生きていく喜びやすばらしさが感得できる。
- 展開の概要

	学習活動と教師の主な発問	教師の関わり
導 入	1 「償い」の曲の最後の部分を聴く。 2 教師とこの曲との出会いを聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・曲の一部を紹介し授業への導入にふさわしい雰囲気をつくる。 ・感動した内容や資料にしたかった想いを簡潔に話す。 ・実際に歌っている姿を録画したVTRを使う。 ・歌詞を印刷したプリントを配布し、目と
	T 「先生は次のようなことに感動したが、ぜひ君たちにも人間としての生き方を考えてほしい。」 ・自分の犯した罪を一生かけて償おうとしているゆうちゃんの生き方に心打たれたこと ・教師ももらい泣きしてしまったこと ・生徒にも人間の生き方を一緒に考えてほしいこと	
	3 「償い」の曲を聴く。 月末になるとゆうちゃんは薄い給料袋の封も切らずに……	

	人間って哀しいね だってみんなやさしいそれが傷つけあってかばいあって 何かもらい泣きの涙がとまらなくてとまらなくてとまらなくてとまらなくて	耳から曲の内容やドラマ性がとらえられるようにする。
展	4 「償い」の歌詞の内容について考え、話し合う。 (1) 全体で感動したことを発表し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が特に印象に残ったところや感動したところをもとに、話し合いを深める。 ・できるだけ多くの生徒が話せるように心打たれたことを中心としてグループで話し合えるようにする。 ・話の糸口が見えるように助言する。 ・一人一人の登場人物について話し合いを進めるのではなく、自分が最も感動したことを素直に出し合い、友だちの考えと比べながら人間のすばらしさや生きる喜びが感得できるようにする。
	<p>T「どんなところが印象に残りましたか。また、感動したのはどこですか。」</p> <p>(2) 特に心打たれたことについてグループで話し合う。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px dashed gray; padding: 5px; width: 45%;">ゆうちゃんの行動と心の中</div> <div style="border: 1px dashed gray; padding: 5px; width: 45%;">奥さんの気持ちやすばらしさ</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px dashed gray; padding: 5px; width: 45%;">ゆうちゃんを見守っている僕(親友)</div> <div style="border: 1px dashed gray; padding: 5px; width: 45%;"></div> </div> <p>(3) それぞれのグループで出された内容を発表し、お互いに聴き合う。</p>	

	5 今までの自分自身を振り返る。	・BGMとして流し振り返りやすい雰囲気をつくる。
	T「この曲を聴き、今までの自分を振り返ってどんなことを感じましたか。」	
終末	6 再度「償い」を聴く。	・歌詞をOHPで提示し、バックにCDをかけ、静かな雰囲気の中で各自が想いに浸れるようにする。

この実践では、資料として教師自身が感動した「償い」という曲を使い、歌詞の中にあるドラマ性と美しいメロディーで生徒の心を揺さぶるように授業を組み立てています。また、その中の登場人物に共感しながら、人間として生きる喜びを見出すことができるように発問構成を工夫するとともに、一人一人の生徒の感動をグループで存分に出し合えるような授業創りがされています。

感動と共感で授業を創ることは、道徳以外の教科等でも実現していくことが必要です。その際次のようなことに配慮することが大切です。

感動と共感で授業を創るポイント

- ① 感動と共感の感じられる教材・資料の発見、開発をする。
- ② 子どもにとって新鮮で感動的な出会いになるよう、音楽、絵、実物の提示の仕方を工夫する。
- ③ 感動や共感のできる場を授業の中に設定する。
- ④ 感動や共感を素直に表現できる、温かい雰囲気のある学級づくりに努める。
- ⑤ 子どもの高さ（発達段階）に応じて感動や共感を表現できる教師になれるよう努力する。

あ と が き

子どもは、だれでも“分きたい”“知りたい”“できるようになりたい”などの「学びの欲求」を持っています。

一方、教師は、子どもたちに“分かってほしい”“できるようになってほしい”という強い願いを抱いて授業に臨んでいます。

それらがうまくかみ合ったとき、真に授業が成立したと言えるでしょうし、よい授業と言えるのではないかと思います。

「新しい学力観に立った学力の定着」を求めて、「子どもの側に立った授業」とか「子ども主体の授業」の展開が叫ばれている今だからこそ、その取り組みに全力を注いでいくことが大切だと考えます。

本書の編集に当たっては、できるだけ具体的な実践例をあげ、各学校の先生方が授業を創る際の参考にしていただけるように努めました。

実際に「授業を創る」ことは、授業を計画し、実施する立場にある教師の極めて大切な仕事だと思います。

目の前の子どもの「学びの欲求」をどのようにすれば満たしていけるかあれこれと思い巡らせ、子どもたちのためによいと思うことを具体的に実施すること、そこにその教師の子どもを思う心の優しさ、温かさがあるように思います。

その意味において、本書で取り上げました事例を一つの手掛かりとして、授業を創る果敢な取り組みがスタートすることになれば、執筆者一同この上なく幸せに思います。

〈 参 考 文 献 〉

図 書 名	著 者 名	出版社名
新学力観に立つ社会科授業	香川県小学校社会科教育研究会	明 治 図 書
社会科評価の理論と方法	中 野 重 人	明 治 図 書
授業研究 Vol.1.31 No.400 1993		明 治 図 書
授業研究 1995.10月号		明 治 図 書
役割演技ハンドブック	江 橋 照 雄	明 治 図 書
道徳教育 97年8月号 (No.461)		明 治 図 書
S-P表の入門	佐 藤 隆 博	明 治 図 書
新しい学力観	下 村 哲 夫	ぎ ょ う せ い
中教審答申から読む21世紀の教育	亀 井 浩 明	ぎ ょ う せ い
新しい授業を育てる100の視点	福岡授業改善研究会	ぎ ょ う せ い
実践 クロスカリキュラム	高 階 玲 治	図 書 文 化
評価のストラテジー	森 川 久 雄	学 事 出 版
教師のためのロールプレイング入門	金 子 賢	学 事 出 版
効果のあがる学習指導	小学校学級経営研究会編	日 本 文 化 科 学 社
授業研究用語辞典	横 須 賀 薫	教 育 出 版
新しい学力観に立つ 教育課程の創造と展開	文 部 省	東 洋 館
新しい学力観に立つ 社会科の学習指導の創造	文 部 省	東 洋 館
新しい学力観に立った学校教育の推進	西 村 文 男	東 京 書 籍
生きる力を育てる学校	西 村 文 男	東 京 書 籍
新しい授業づくりと形成的評価	梶 田 叡 一	東 京 書 籍
個に応じる学習	杉山吉茂 石坂和夫 編	東 京 書 籍
環境教育指導資料 (小学校編、中学校・高等学校編)	文 部 省	
研究紀要86号	沖縄市立教育研究所	
基礎学力向上の手引き第2・3集	県教育庁義務教育課	

〈執筆者・編集委員〉 水 野 信 宮 前 貢
佐久間 俊彦 武 田 義 信
藤 田 克 彦 矢 吹 哲 三
渡 部 和 俊 後 藤 修
菅 家 昌 人 原 隆
高 橋 弘 悦 馬 目 俊 一

印 刷 平成10年1月

発行日 平成10年1月

発行所 ☎960-0101

福島市瀬上町字五月田16

福島県教育資料研究会

(福島県教育センター内)

☎ (024) 553-3141

発行責任者 水 野 信

印刷所 (株)アト印刷

福島市早稲町8-26

☎ (024) 523-4475